

能のしなり五の巻



百九十五

美作
西衛

望月



百九十四

かの本領に立ちかへり。子孫に傳へ今の世に。その名かくれぬ御事は。弓矢の謂れなりけり。く」と。刀をさめ兩手にて子方を連れゆき。仕手柱先に立たせ。シテは其うしろに立ちて。心の晴れわたりたるさまにてイウケンし。脇柱の方を跡にしてたらくと下ると。子方は其内にシテの前を通りて入り。シテは橋掛の方向きたるまゝにて二足つめ留むる。この橋掛の方へ向き留むる事。下懸にては常なれど。上懸にては此一番あるのみ。

金春流にてはツレ杖を持たず。シテ刀を持たず。扇を刀に代へてワキを切るなど。古雅なる處おほし。

シテの「かたきを手ごめにしたりけり」の處。諸流にてはワキを捕へて問答する形あり。觀世流にてもとは。シテ走りゆきとワキを捕ふると。ワキ「そもく是は何者ぞ」と驚き問ふ。

子方「御身の討ちし安田の莊司が。其子に花若われぞかし」と

答ふ。ワキ又「さて亭主と見えしは誰なれば。かほどに我をたばかりけるぞ」と問ふ。シテ「小澤の刑部友房よ」と答ふ。ワキ「あら物々しと引つ立て行けば」と立ち上らんとするを。シテ「引つすゆる」と押し伏せ。ワキ「振れども切れども。」シテ「離さばこそ」と。ワキこゝにてはづし切戸より入る。シテと子方は笠を敵として切るといふ事なりしに。いつよりか是も改めたり。改めたるがよきか元のまゝなるがよきか。何れにしてもワキは殺さるゝまでは舞臺に居らぬなり。猶他に工夫もあるべきか。能知らぬ人の始めて見たりし時。残念なり。ワキは逃げたりと叫びしといふ話あり。田夫野人の言また取るべしとせば。これも参考にはなるべきぞかし。

大瓶狸々

作物 壺

前ジテ 童體の男

慈童 黒頭 鬘斗目 水衣 腰帶 扇

後ジテ 狸々

面強々 赤頭 緋の着附 赤地半切 赤地唐織坪折

腰帶 扇 柄杓うしろにさす

ツレ四人 狸々

シテと同じ出立 但し柄杓はさしず

ワキ こうふう

厚板 大口 側次 腰帶 扇

常の狸々と同じく。こうふうの孝行にめてい。盡させぬ酒の泉を授くる事を作れり。されど文句はすべてかはり。前ジテあり

て後にはツレ多く出づ。太鼓あり。季節は秋。地は唐土。

名乗笛にてワキ出で。「是はもろこし金さんさんの麓に。こうふうと申す民にて候。われ親に孝あるにより。次第々々に富貴の家と罷り成りて候。又此間いづくとも知らず童子あまた來り。某が酒を買ひ取り候。今日も來りて候は。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候」と名乗すみて脇座に着く。

一聲にて
シテ出づ

初同

一聲にてシテ出で。舞臺に入りて仕手柱に立ち。「わたづみの。そことも知らぬ波間より。あらはれいづる日影かな」と歌ふを見て。ワキ「今日の市人は何とて遅く來り給ふぞ」といひ。シテ「うれしやさらばと内に入り。いつもの酒を愛しけり」と。ワキの方へゆき眞中に座す。これより酒を飲む心にて初同となる。「琴詩酒と。聞くも隔てぬ友人の」の打切に正面へ直し。「さくも隔てぬ友人の。いつもかはらぬ酒功費に。酒を愛せし來しかたの。人の心に引きかへて。

能のしかり 五の巻

申入

作物出て
下羽にて
出ツレ二人

是は琴にも盃。詩を作るにも盃。たゞ酒飲の友ばかり。耻かしやさこそげに。市人の我を笑ふらん」と終りて。ワキ「此程は何くの人も辨へず。今日は御名を名のりおはしませ」といふ。シテ「今は何をか包むべき。是は薄陽の江に年久しき。狸々といへる者たるが。御身親に孝あるにより。天のあはれみ深ければ。泉の邊を與へんなり。疑ひ給ふなこうふう」とワキへ向ひ。「夕べの空も近ければ。暇申してさらばとて」と。面伏せ別れを告ぐる心にて立ち。「ゆくか」と見れば狹丹塗の。面も赤く様かはりて」と正面へ開き。「市人に立ちまぎれて」と右へ廻り。「跡も見えずなりにけり」と開き。返しに申入す。

後は壺の作物正面先に出て。其前に一壺臺出て。下羽になりてツレ二人出て來り。舞臺に入り。一のツレは左に二のツレは右に並び立ち。左右打込して開き。「御酒と聞く。く。名もすさましく秋の來て。

又下羽に
てシテ及
びツレ二
人出づ

あたゝめ酒と菊月の」と正面へ二人とも出て。「頃もはや紅葉の。早色づくか一重山」と開きて山の心にて上の方を見。「うすきもみぢ葉色々の」と紅葉をさしまはして見。「菊の盃すゑあき。秋の夜深く待ちけるに」と。盃を据ゑおく心にて二人とも下に居。「不思議や此友の」と二人向き合ひ。「不思議や此友の。來らぬは覺束な」と幕の方を見。「沖に向ひて我友の」と立ち。「など遅なはり給ふぞや。急ぎ給へ友人」と幕の方に開き。又下羽になりて。二人のツレは臺の左右に行きて立ち居るを。三のツレ、シテ、四のツレと出て。橋掛にて三人正面に向きて留め。「また狸々はあらはれいてい。く。彼こうふうに。妙なる泉を與へんとて」と。三人とも舞臺に入り。「波間を分けて薄陽の江の。汀も近くあらはれたり」と。シテを中化して囃子方の前に正面むきて立ち。「頃は秋の夜月おもしろく」と。シテは頭を取りて月をながめ。「汀の波も更け静まりて」と右の方受けて波をな

がめ。「あまたの程々大瓶にあがり。泉の口を取るとぞ見えしが」と。
 三人とも壺の側まで進み。三のツレは直に壺に上りて壺の蓋を取り
 下に置き。四のツレも上りて明きたる壺の中をのぞき見。それより
 二人壺を下り橋掛にゆきて立ち居ると。シテは壺に上りて。「湧きあ
 がり湧き流れ。汲めどもく盡させぬ泉」と。扇を開き左の手に持
 ち。うしろにさしたる柄杓を抜きて。壺の中の酒を扇に汲み入るゝ
 形をなし。扇たゝみて壺を下り。「いづれも戯むれ舞ふとかや」と。
 始より立ち居る一二のツレと共に囃子方の前にゆき。正面むきて。
 五人相舞の破掛中の舞となる。三人はシテ真ん中になりて舞臺にて
 舞ひ。他の二人は橋掛を舞臺にして舞ふなり。
 舞をはりて四人のツレは扇を左に取り。枕の心にて顔に當て安座し
 居ると。「菊の露。つもりて盡きぬ此泉」とシテ歌ひて上扇し。「つき
 せぬ宿に」と左右打込し。「返し授け置き」とワキへ向き。「是までな
 キリ

酒を酌む

五人相舞
に中の舞
を舞ふ

シテ眠る

シテ又酌
にすい
む人

りや酔ひ伏す夢の」とシテも扇顔にあて、下に扇をさむると思へば
 又おきあがり」と。覺めたる心にて扇のけ面上げ壺に上り。「命長柄
 の柄杓の酒を」と。又柄杓取りて壺を扇に汲み入れ。「道俗男女に殘
 さず授け」と。扇前へ出だして雨のかひ。「もとの泉にをさまりけれ
 ば」と柄杓を壺の上に置き。扇右に取り直して壺を下り。「いづれも
 く足もとはよろく」と跡しさらに大小前まで下り。「千秋萬歳君
 千代までも」と指して右へ廻り。「榮ふる御代こそめでたけれ」と開
 き。留拍子ふむ。四人のツレは。「さむると思へば又おきあがり」と。
 シテの立つ時。一同に扇のけて立ち。壺の側まで行き。「足もとはよ
 ろく」とシテと共に下り。シテの指す時一同に橋掛へさしてゆき。
 拍子ふまずに橋掛にて留むるなり。大瓶の文字をオホガメと讀まず
 にタイヘイと讀ませたるは。天下泰平の言葉に通はせたるなれば。
 祝言には此上なき曲なるべし。

能の葉五の巻終

明治三十六年十一月十日印刷
明治三十六年十一月十日發行

能の葉をり五の巻

定價金四拾錢

著者 大和田建樹

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市京橋區四辨屋町廿六七番地

印刷者 石川金太郎

東京市京橋區四辨屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

版權所有

發兌元

東京市日本橋區本町

博文館

幸田露伴先生校訂全三冊和裝中判横綴美本(下卷近刊)

和泉大蔵
兩派對照

狂言全集

總紙數約千三百頁
上中卷既刊發賣
正價一冊八拾錢
郵稅一冊八拾錢

上卷 狂言記目次		下卷 狂言記拾遺目次	
(一) 烏帽子折り	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(一) 三木柱	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(二) 七騎落	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(二) 松の精	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(三) 福波	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(三) 松の精	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(四) 茶壺	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(四) 手負山賊	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(五) 末廣がり	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(五) 老武者	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(一) 烏帽子折り	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(一) 文相撲	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(二) 七騎落	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(二) 盗人連歌	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(三) 福波	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(三) 唐人相撲	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(四) 茶壺	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(四) 水汲新發意	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
(五) 末廣がり	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	(五) 柴阿彌	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

文學博士三上參次先生序文 文學士藤岡作太郎先生序文
文學博士芳賀矢一先生序文 文學士嶋文次郎先生序文
山本九馬亭著 太夫竹本攝津大椽 竹本彌太夫贊助

淨瑠理通解

全部十二冊大判和裝
美本正價一冊參拾五錢
前金六冊貳圓十二冊參圓八拾錢
郵稅一冊六錢宛

次目編一第刊既		次目編二第刊近		次目編三第刊續	
〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

淨曲が徳川文學の精華にして當時の世態を反映せしにも係はらず學者其人を惜みて其書を捨て敢て一顧を與へざりしかば永く磨がざるの玉となりて空しく今日に至れり近時諸大家漸く其篇を認めこれが研究に従事するを見る著者久しく斯文に研鑽し精勵遂に通解を完ふす此文學は上雲上より下裏長屋に至る迄神祇釋教懸無常あらゆる社會の狀態を寫せるものなれば用語の範圍頗る廣く隨て解釋の難澁なるもの紛しとせず著者茲に注意し專詞曲節の調よき歴史地理の大意に涉り雙語を遺さず正を實し全を求めて斯文の精華を啓發して餘蘊なし蓋し淨曲の寶庫は此得がたきの秘編を得て始て世に萬丈の光彩を放つものといふべし

96
185

大和田建樹先生著

(再版)

歌まなび

全一冊
中判
頗美本

洋布金字入 正價壹圓五拾錢
紙數約千卅頁 郵稅拾六錢

歌は文學の最も高尚なるものなり、
月夕花晨一たび之を詠すれば美感踊
躍其快實にいふべからず、而して
世に作歌の指南書多しと雖も、或は
繁に過ぎ或は簡に失し其中庸を得た
るもの少し、「布留の山踏」「和歌初
學」の如きものあれども、既に陳腐
に歸せんとするの今日、此書の出で
たる、和歌初學者の暗夜を導く燈明
とも謂つべし、部類は四季雜に分ち、
題毎に懇切なる説明を附し、用語用
句を列舉し、尙卷尾に豊富なる古今
名家の作例を掲げて其の模範を示せ

(十一版)

散文雪月花

洋紙
裝皮珍

▲正價參拾五錢 郵稅六錢

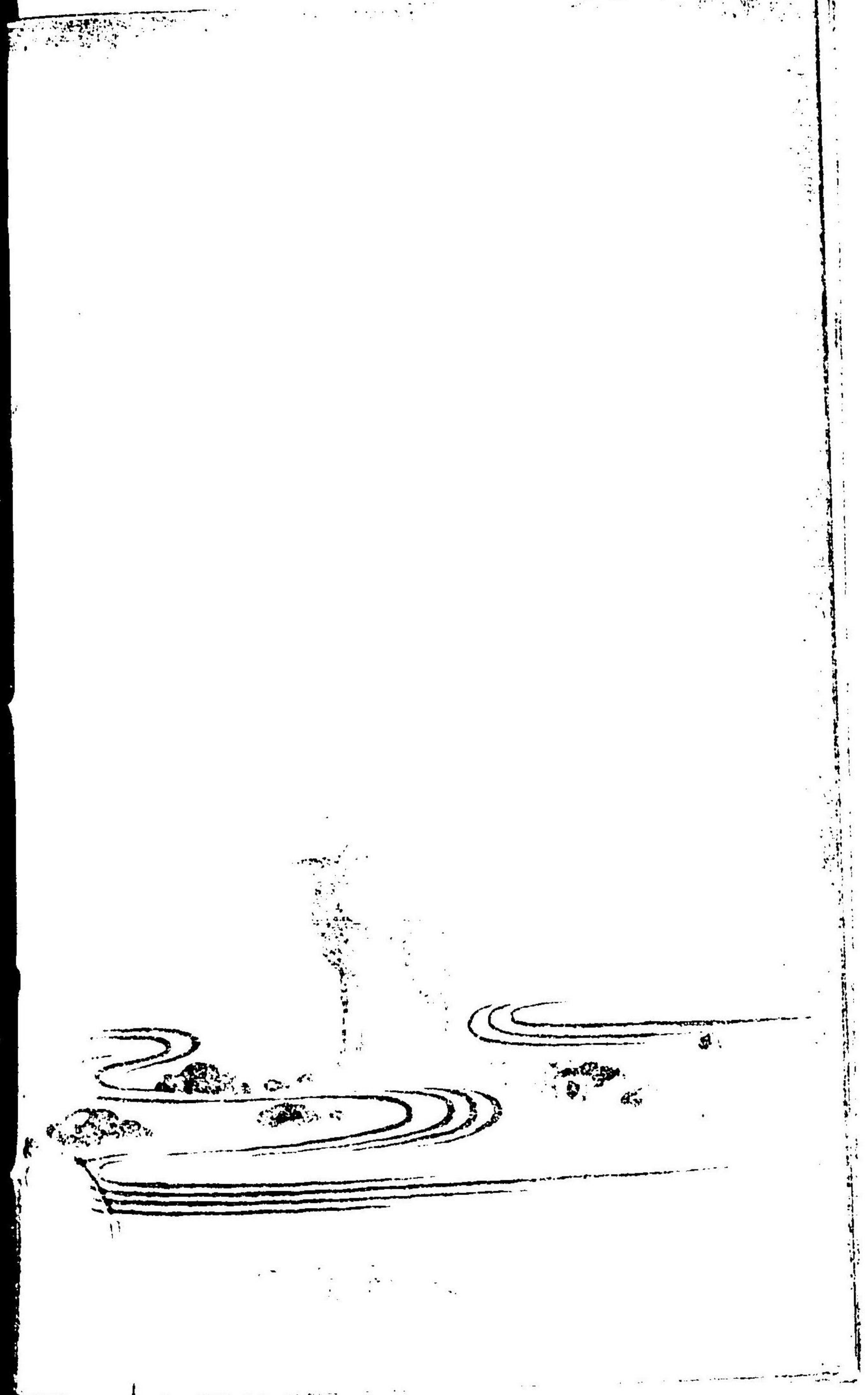
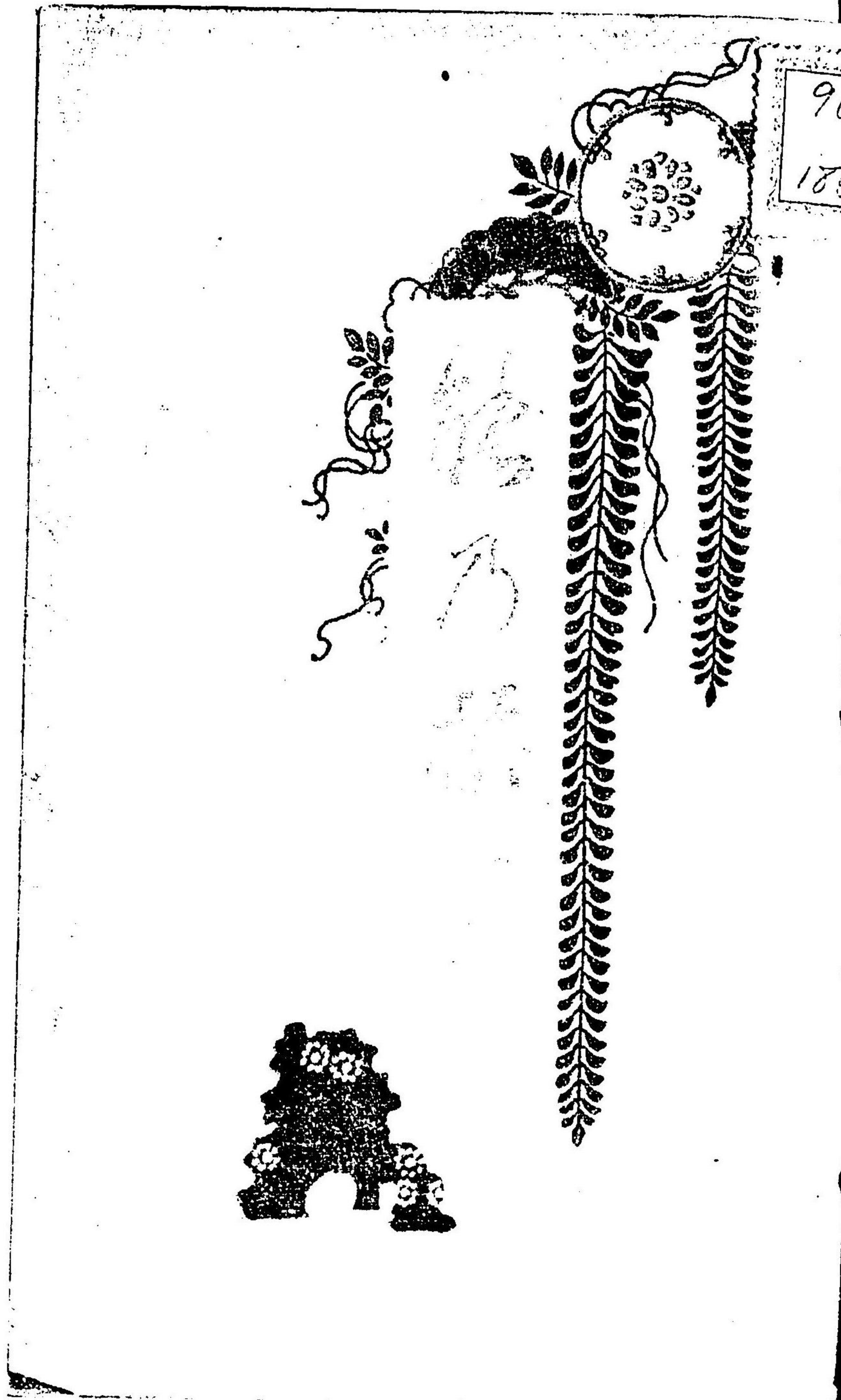
其文は清楚婉麗、趣味擲すべく、其歌は
優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風
を生じ、言々花を降らすものは、大和田
先生の筆となす。此編收むる所、無慮二
百篇、蓋し落寞振はざる今日の文學界中
に旗幟たるものは、此書を措きて他に又
た何かある。

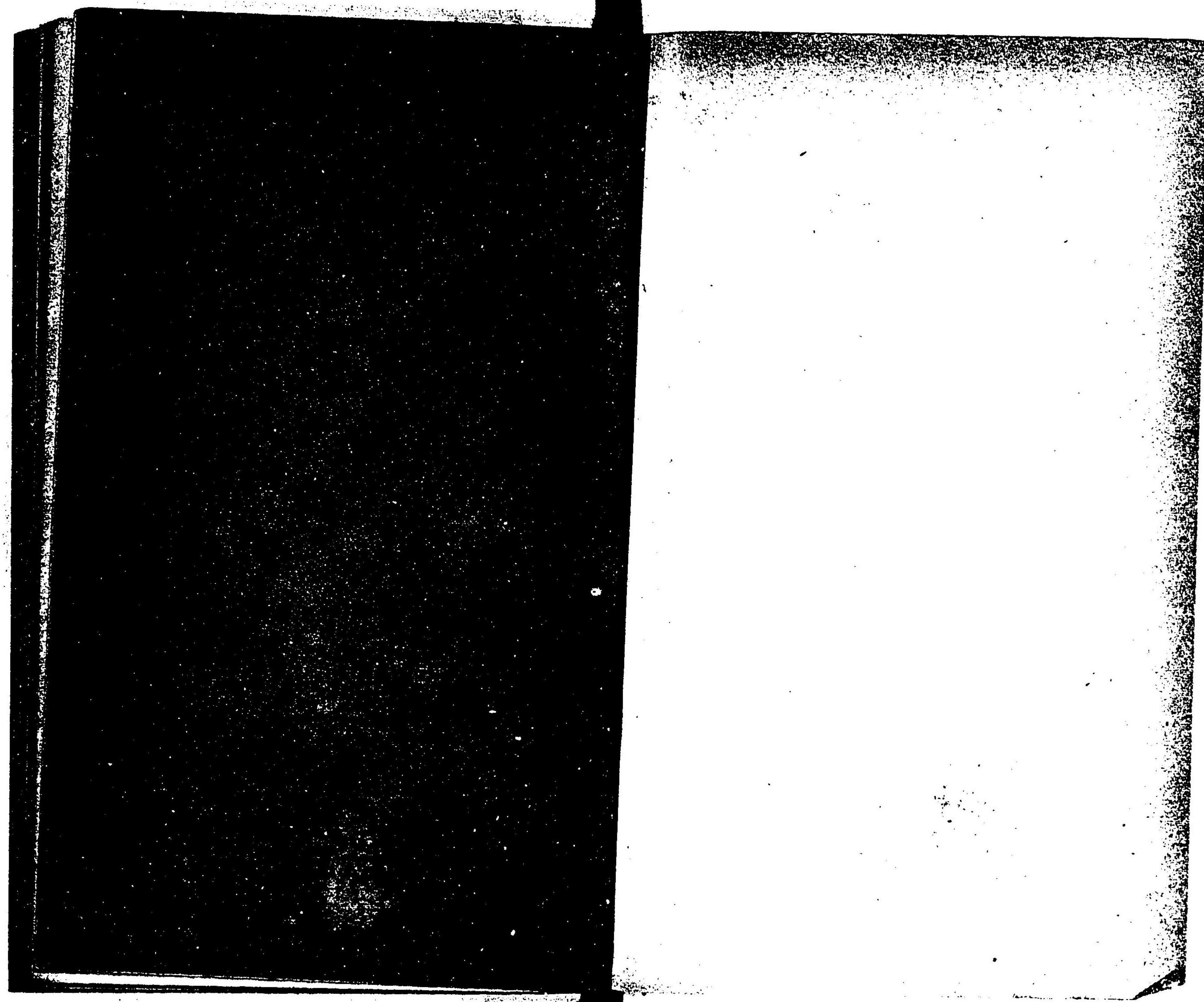
散文深山櫻

洋紙
裝皮珍

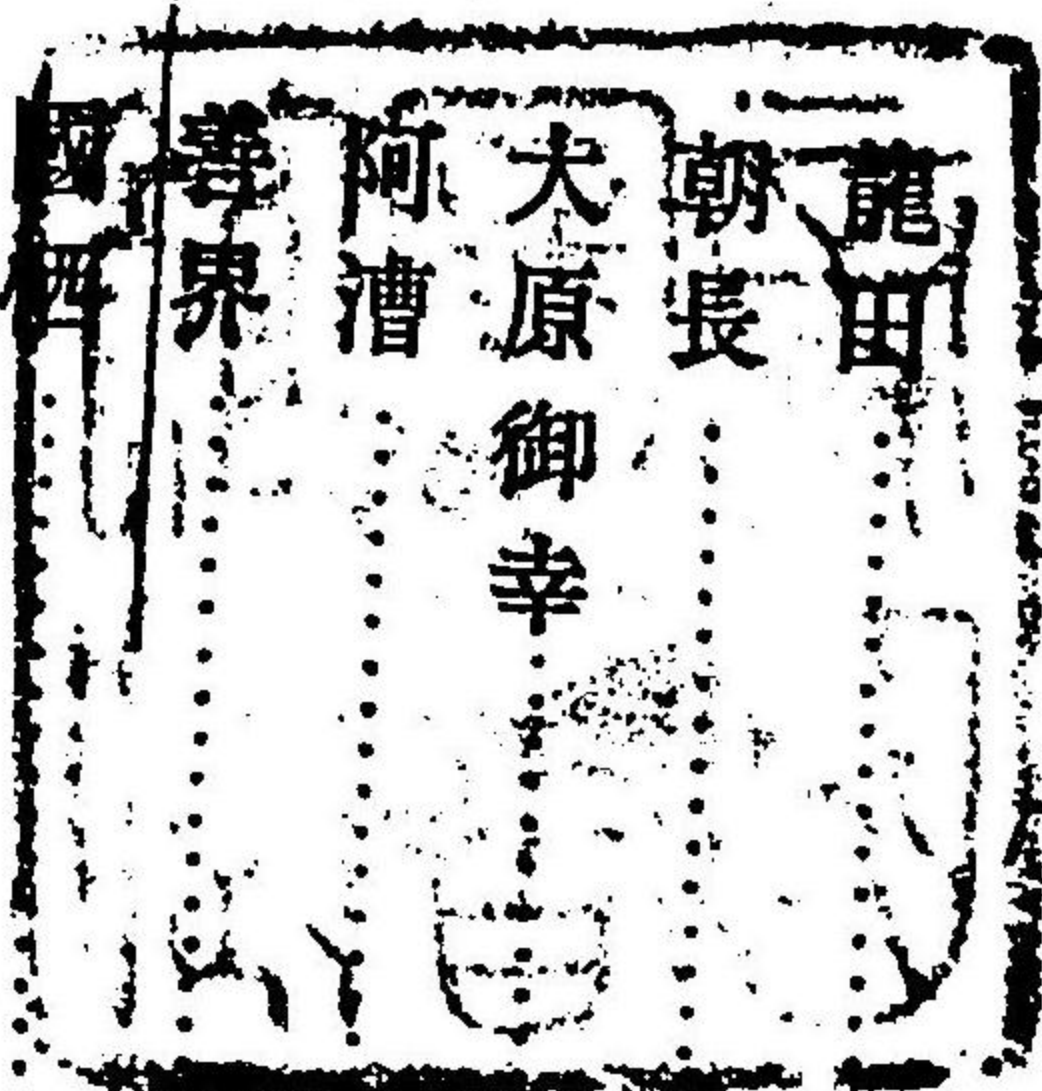
(三版) ▲正價四拾錢 郵稅六錢

著者大和田先生が文學に深く措辭に妙な
るは世既に定評あり、今此書は新作の散
文韻文二百二拾餘篇を輯めたる者、一た
び之を繕かば、櫻の山に分入りて清香衣
襟に滿つる如く讀者をして、手を放へ能
はざらしむるの妙あるべし。





目次



鐵輪	一四三
鵜飼	一三〇
蟬丸	一一五
砧	一〇〇
弱法師	八七
國	七〇
善界	五八
阿漕	四六
大原御幸	三九
朝長	二五
龍田	一

明治
 27 1 21
 内交
 三九 五

大佛供養……………一五六、

班女……………一六五

藤戸……………一七四

大江山……………一八五

能の栞六の巻

大和田建樹著

作物宮

龍田たつた

前シテ かななぎ

増くわ 葛帯 箱 唐織着流 扇

後シテ 龍田姫

天冠 色大口 長組 腰帶 幣

他は前シテに同じ

ワキ 旅僧

角帽子 髪斗目 大口 水衣 腰帶 屏さし 数珠持つ

ワキヅレ 隨行僧

能のしをり六の巻

龍田の明神あらはれて旅僧に言葉をかはし。神慮すしく神樂など舞ひ給ふことを作れる能なり。神祇の部に屬すれば脇能にも使へど。僧脇なれば略式に外はならず。葛物なれば三番日本旨たるべし。太鼓あり。季節は十月。地は大和。小宮に引廻かけたるを先づ大小前に出だし置く。龍田の社殿の心なり。

作物出づ

ワキ出づ

ワキとワキゾレと次第にて出で。舞臺に立ちならび合ひて。「教への道も秋津國。く。數ある法を納めん」と歌ひ。地取にて正面直し。「是は六十餘州に御經を納むる聖にて候。われ此程は南都に候ひて。靈佛靈社のこりなく拜み廻りて候。又これより龍田越にかゝり。河

シテ呼掛にて出づ

内の國へと急ぎ候」と。道に龍田を過ぐべきよしを述べ。道行になり三人同音にて「ふるき名の。奈良の都を立ち出で。く。有明残る雲間の。西の大寺をよそに見て。はや暮れすぎし秋篠や。外山の紅葉名に残る。龍田の川に着きにけり。く」と。今しも龍田川の岸まで來たる事を歌ひ。「此川を渡り明神に參らばやと思ひ候」と。汀にあり立たんとする心にて脇座の方へゆくを。「なふくその川な渡り給ひそ申すべき事の候」と。シテ呼掛にて幕を離れ。しづくと橋掛に出で來る。通例は唐織着流にて扇を持ってども替裝束の時は。腰巻に白練を坪折り。櫛の枝を持つ事もあり。その折は後シテも腰巻の上に長絹を着し。大口を用ひず。天冠には紅葉をかざし。又クセ神樂すべて櫛にて舞ふ事もありといふ。呼び掛けられてワキは振り向きシテの方を見て。「不思議やな此川を渡り。龍田の明神にまゐり候處に。何とて其川な渡りそとは承り候

シテとワ
答との問

ぞ」と問ふ。シテ「さればこそ神に参り給ふも。神慮に逢はん爲めならずや。心もなくて渡り給はじ」と一の松に留めて。「神と人との中や絶えなん」と歌ひながら正面むき。「よくく案じて渡り給へ」とソキに答ふ。ワキ「げに今思ひ出だしたり。龍田川紅葉みだれて流るめり。渡らば錦中や絶えなんとの。古歌の心を思へとや」と。此間にシテはそろりくと舞臺に入り。「中々の事この歌は。紅葉の水に散り浮きて。錦を張れる如くなれば。渡らば錦中や絶えなんとなり。それにつき猶々深き心もあり。紅葉と申すは當社の神祇。神の恐れもあるべければと。戒め給ふ心もあり」と。仕手柱にてソキに向く。ソキ「げにくそれはさることなれども。紅葉の頃も時すぎて。川のおもても薄氷にて。立つ波までも見えぬなり。ゆるさせ給へ渡りてゆかん」と。少し出でんとするを。シテ「いやく猶も御とがあり。氷にも又中たえんとの。其戒めもあるものを」と引き

初同

留めていふ。ワキ「ふしぎや紅葉の錦ならで。氷にも又中たえんとの。謂れは如何なる事やらん」と問ひ返し。シテ「紅葉の歌は帝の御製。又その後家隆の歌に。龍田川もみちをとづる薄氷。わたらばそれも中や絶えなんと。重ねてかやうによみたれば。必ず紅葉に限るべからず」と。しつかりと詰足してソキへ説明し。初同になりて。「氷にも中たゆる名の龍田川」と正面直し。「錦むりかく神名月の」と。ながむる心にて右受け。「冬川になるまでも。紅葉をとづる薄氷を。情なや中たえて」と。正面へ出て開き。「わたらん人は心なや」とソキに向ひ。「さなきだに危きは。薄氷を踏む理りの。たとへも今に知られたり。く」と。左へ廻りもとの處に歸りてソキへ向く。あまりに理りを述ぶるさまの不思議なれば。ワキ「御身は如何なる人にて渡り候ぞ」と問ひ。シテ「これは靨にて候」と答へ。「明神へ御参り候はゞ御道しるべ申し候べし」といふ。ワキ「あら嬉しや御

供申し。宮めぐり申さうずるにて候」といへば。シテは右の方へ少し出て作物の方へ振り向きて。「是こそ龍田の明神にて御入り候へ」と教へ。「よくく御拜み候へ」とワキの方へ少しゆきてすわる。ワキも作物の方へ向ひ。社頭に参りたる心にて。「ふしぎやな頃は霜降月なれば。木々の梢も冬がれて。けしき淋しき社頭の御垣に。盛なる紅葉一もと見えたり。是は神木にて候か」と問ふ。シテ「さん候當國三輪の明神の神木は杉なり。當社は紅色にめて給ふにより。紅葉を神木とあがめ参らせ候」と答ふ。ワキ作物に向ひて下に居。「ありがたや我國々をめぐり。今日は又此御神にまゐる事の有難さよ。和光同塵は結縁のはじめ。八相成道は利物の終り」と歌ひ。地になりて。「下紅葉塵にまじはる神心。和光の影の色そへて。我等を守り給へや」と。ワキは合掌拜禮する心あり。

「ことさらに此たびは。く。幣とりあへぬ折なるに。心して吹け

嵐。紅葉をぬさの神心」と。ワキも正面に直し。シテも正面むきゐて。謠の文句にあづけ。社頭のさまをも想像さする心あり。「神さび心もすみわたる。龍田の峯はほのかにて」と。笛柱の方を龍田の峯の心にて。シテは少しく見上げ。「川音も猶さえまざる夕暮」と。正面直して面伏せ静に川音を聞く形をなす。面白き處なり。

「いざ宮めぐり申さんとて」とワキに向ひ立ちて。「同じかざしの樹葉を。とりくに乙女子が。もすそをはへて袖をかざし。運ぶ歩みの數々に。度かさなると見る程に」と。ワキを伴なひ宮々を巡拜する心にて。角の方より左へ静に廻りて仕手柱に歸り來り。「ふしぎやな今までは。只かんなぎと見えつるが。我は誠は此神の。龍田姫は我なり」と。脇正面より左の袖あしらひてワキへ開き。「名のりもあへず御身より。光を放ちて紅の袖を打ちかづき」と。正面に向ひ扇ひらきイウケンして光を放ちたる形をなし。「社壇の扉を押し開き

と。右へ廻りて作物に向ひ。横扇をなし戸を開く心にて。「御殿に入らせ給ひけり」と一度正面に開き。返しにて作物の中に中入す。

アヒ出て、ワキとモンダイありたる後。ワキは處の人ならば當社の謂れ委しく御物語り候へといふと。アヒ正面むきて語る。

アヒ「そもく和州龍田の明神と申すは。天神七代目いざなぎいざなみの夫婦の御神。天の浮橋の上にして。天の御鉢をさしおろし海底をさぐり給ふに。鉢にあたりたる物あり。何ぞと思召しければ蘆の葉なり。其御鉢のしたゞり凝りかたまりて秋津島を開き給ふ。即ち蘆原の國とも申し又は倭の國とも申し候。さてみとのまぐはひありて一女三男生じ給ふ。これを國のあるじと申す。伊勢天照太神一女の御事にて候。その御鉢をば當山に納め申されて候。又當社に紅葉を神木とあがめ申すは。御鉢の先八葉にて候ひしかば。八葉のみちとな

り申したる故に。明神の御寵愛にて御座候。然れば帝の御詠歌にも。龍田川紅葉みだれて流るめり。渡らば錦中や絶えなんと。遊ばし候を本歌として。藤原の家隆の卿。龍田川もみちをとづる薄氷。渡らばそれも中や絶えなんと。よみ給ひたると承り候。總じて此所におきて。當社の謂れさまく御座ありげに候へども。我等くはしき事は存せず候。とワキに向ひ。

先づ承り及び候分荒々申し上げ候。さて何と思召し候ひて只今御尋ね候ぞ。ワキ「戀に承り候物哉。是は六十餘州に御經を納むる聖にて候が。河内の國へと志し。あの龍田川を渡らんと思ひて候へば。何くともなく女性一人來り給ひ。その川なわたりそと承り候程に。何とてさやうに仰せ候ぞと申して候へば。只今御物語の如く龍田川につき。又は紅葉につきての詠能のしなり六の巻

歌どもの謂れを懇に承り。其後當社のかんなぎにてある間。明神への道しるべあらうずるとあつて。是まで御供申して候。宮廻りし給ふと思ひて候へば。龍田姫は我なりと。名乗りもあへず御殿に入り給ふと見えて。姿を見失ひて候。餘りに不審に存じ尋ね申す事にて候。アヒは奇特なる事を仰せ候物かな。さては疑ふ處もなく。當社明神にて御座あらうずると存じ候。いよ／＼神前に於て信心をこらし給はゞ。重ねて奇特を御覽せられうと存じ候。ワキ我等もさやうに存じ候間。今夜は神前に通夜申し。かさねて奇特を拜まうずると存じ候。

待時

といひ。アヒは引きて入る。

後ウテ歌
ひ出だす

ワキの待時。「神の御前に通夜をして。／＼。有りつる告を待たんとて。袖を片しき伏しにけり。／＼」と歌ひて。夢中の明神の出現を拜する心を知らせ。出端ありてシテ作物の中より歌ひ出だす。「神は

クセ

非禮を受け給はず。水上清しや龍田の川」と。地「御殿しきりに鳴動して。宜禰が鼓もこゑ／＼に」シテ「有明の月。ともし火の光」地「和光同塵おのづから。光も朱の玉垣かゝやきて。あらたに御神體あらはれたり」と。引廻あると。シテは天冠さらびやかに。作物の中に床几に掛け居り。

これよりクリありサシありてクセとなる。クセの前の打切にて床几を立ち作物の前に出で。「年ごとに。もみぢ葉流る龍田川。港や秋のとまりなる」と拍子ふみ。「山も動ぜず。海邊も波しづかにて。樂のみの秋の色」とさしまはし。「名こそ龍田の。山風もしづかなりけり」と。据拍子ありて打切になり。「然れば世々の歌人も。心を染めてもみぢ葉の。たつ田の山の朝霞。春は紅葉にあらねども。たゞ紅色にめてたまへば」と。角とり廻りて。「今朝よりは。龍田の櫻いろどこき」と開き。夕日や花の時雨なるらんと。よみしも紅に。心を染め

し詠歌なり」と。右へ廻り正面ひらきて左右し扇ひろげて前へ横に出だし。「神なびの。みむろの岸や崩るらん」と上扇して。「たつたの川の。水は濁るとも。和光の影は明らけき。真如の月は猶照るや」と常式の形ありて。「龍田川もみぢ亂れし跡なれや」とさしまはして河のおもてを見。「古へは錦のみ」と右へ廻り。「今は氷の下紅葉。あら美しや色々の」と。胸ざしめて正面の下の方に氷を見。「紅葉重ねの薄氷。渡らば紅葉も氷も」と角へさしゆき。「わたらば中たゆべしや。如何て今は渡らん」と廻りて左右しワキへ向く。

神樂

「さる程に夜神樂の」と正面直し。「宜禰が鼓も數至りて」と開き。「月も霜も白和幣」とくつろぎて幣を持ち。「振り上げて聲すむや」と太鼓の打出しありて。仕手柱先に立ち。コヒアヒ聞きて「謹上」「再拜」と幣を振り。達拜して神樂となる。幣捨には序、掛り、初段、二段、幣捨などいふ順序ありて。幣捨の



キ

段にて幣を後見に渡し。扇ひらきて神舞に直り。あと二段ありてワカとなる。此神樂も替にては。神舞に直らずに神樂留になる事もあり。五段神樂とて五段を皆神樂にして舞ふ事もあり。

「久方の。月も落ちくる瀧祭」と上扇し。「波の龍田の」と左右打込し。「神の御前に散るはもみぢ葉」と出で。「すなはち神のぬさ」と開き。「龍田の山風の。時雨ふる音は」とさしまはして見。「娘々の鈴の聲」と面伏せて聞き。「立つや川波は」「それぞ白ゆふ」と廻り。「神風松風ふきみだれ」と。脇正面の方よりワキの方へハチ扇して出で。「もみぢ葉散り飛ぶ夕つけ鳥の」と。下の方に散りしく紅葉を見ながら面つかひて角の方へ行き。「御祓も幣もひるがへる小忌衣」と袖かづきて脇座の方へゆき。袖あるして。「謹上再拜さいはい」とと仕手柱にさしゆき。「山河草木國土をさまりて」とかざして廻り。「神は上らせ給ひけり」と詰足留拍子かたの如し。

朝長

前ジテ 長者の娘

深井 葛 葛帯 箔 唐織着流 木の葉と数珠持つ

女ツレ二人 侍女

女面 唐織着流

又男ツレ太刀持ち出て出づる事もあり

後ジテ 太夫進朝長

今若 黒垂 梨子打烏帽子 白鉢巻

厚板 中切 法被 腰帶 太刀 扇

ワキ 清涼寺の僧

角帽子 鬘斗目 水衣 腰帶 扇 数珠

ワキツレ 從僧

龍のしをり 六の巻

シテ同じ

アヒ 處の者

狂言上上 扇

左馬頭義朝の二男に中宮少進朝長といひしは。平治の合戦に打ち敗れて。父と共に青墓の宿まで落ちゆきけるが。身に負ひたる重手に堪へかね。こゝにて自害し果てたり。その時宿りたりし長者の家の娘。殊勝にも亡き跡吊ひて墓参したりしに。折しも朝長の御めのとまりしといふ人の出家したるが詣であひしかば。名のりかはして我家に伴なひ歸り。讀經などして佛事をなしむるに。夢うつゝともなく朝長の亡魂きたりて。そのかみの有様を語る事を作れり。太鼓あり。季節は正月。地は美濃。唯子方座に着くとワキ出て、名のる。「是は嵯峨清涼寺より出てたる僧にて候。さても此度平治の亂れに。義朝都を御開き候。中にも太

ワキ名乗る

道行

次第にてシテ出づ

夫の進朝長は。美濃の國青墓の宿にて自害し果て給ひたるよし承り候。我等も朝長の御縁の者にて候程に。急ぎ彼所に下り御跡を吊ひ申さんと思ひ立ちて候。」都に在りて是より旅立たんとする志を述べたるなり。ツレの僧は名のりの間下に居。道行より立ちて同吟す。道行は。「近江路や。瀬田の長橋うちわたり。なほ行末は鏡山。老僧の杜を打ち過ぎて。末に膽吹の山風の。不破の關路を過ぎ行き。青墓の宿に着きにけり」にて。不破より美濃路に入りたるなり。歌ひ終りて脇座に行き下に居ること例の如し。次第になりてシテ出で。ツレ女（或は男ツレ。又女ツレの次に太刀持のツレ出づるもあり。下懸にてはシテ女一人にてツレ出でず）と舞臺に立ち並びて。「花の跡とふ松風や。く。雪にも恨なるらん」と歌ひ。地取ありてシテ正面に向ひ。「是は青墓の長者にて候」と歌ひ。ツレも同音にて。「それ草の露水の泡。はかなき心のたぐひにも。

能のしなり 六の巻

シテ墓地
につく

問答
ワキ

あはれを知るは習なるに。是は殊更思はずも。人の歎きを身の上に。かゝる涙の雨とのみ。しをるゝ袖の花薄。穂に出だすべき言の葉も。泣くばかりなる有様かな」と歌ひ。上歌のトメ「痛はしかりし有様を。思ひ出づるもあさましや。く」と入りかはり。ツレは皆地の前へゆきてすわり。シテは仕手柱に来る。家より墓地に着きたる心なり。

諺すみてワキを見つけ。「不思議やな此御墓所へ我ならては。七日七日に参り。御跡とむらふ者もなきに。旅人と見えさせ給ふ御僧の。涙を流し懇に吊ひ給ふは。如何なる人にてましますぞ」と問ふ。

ワキ「さん候これは朝長の御ゆかりの者にて候が。御跡とむらひ申さんため是まで参りて候」と答ふ。シテ「御ゆかりとはなつかしや。さて朝長の御ため如何なる人にてましますぞ。」ワキ「是は朝長の御めのと何がしと申す者にて候ひしが。さる事ありて御暇賜はり。は

初同

や十箇年に餘り。かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り。御跡とむらひ申したくは候ひつれども。怨敵の縁をば。出家の身をも許さねば。抖擻行脚に身をやつし。忍びて下向仕りて候。」シテ「さては取り分きたる御馴染。さこそは思召すらめ。わらはも一夜の御宿りに。あへなく自害し果て給へば。只身の歎きの如くにて。かやうに吊ひ参らせ候。」ワキ「げに痛はしや我とても。もと主従の御契。これも三世の御値遇。」シテ「わらはも一樹の陰の宿り。他生の縁と聞く時は。げに是とても二世の契の。」ワキ「今日しも互にこゝに来て。」シテ「とむらふ我も」ワキ「朝長も。」それより地になりて。「死の縁の。所はあひにあうはかの。く。跡のしるしか草の陰の。青野が原は名のみして。古葉のみの春草は。さながら秋の浅茅原」と。静に正面へ出て。「萩の焼原の跡までも。げに北邙の夕烟」と。右の方見まはして心持あり。「一片の。雲となり消えし」と正面直し。「空は

色も形も。なき跡ぞあはれなりける」と下りて打ちしをる。何とな
く身にしみわたる墓前のけしきなり。

ワキこゝに於て。朝長の最期の有様を語つて聞かせと望む。シテ眞
ン中へ行き下に居て。「申すにつけて痛はしや。暮れし年の八日の夜
に入りて。門を荒けなく敵く音す。誰なるらんと尋ねしに。鎌田殿
と仰せられし程に門を開かすれば。物の具したる人四五人内に入り
給ふ。義朝御親子。鎌田金丸とやらん。わらはを頼み思召す。明
けなば河船に召され。野間の内海へ御落ちあるべきとなり。又朝長
は都大崩れにて膝の口を射させ。とかく煩ひ給ひしが。是より心凄
く調子おさへて。「夜更け人静まつて後。」少しはツきりと。「朝長の御
聲にて。南無阿彌陀佛」と二聲のたまふ。更にはツきりと。「鎌田
殿まゐり。こは如何に朝長の御自害候と申させ給へば。義朝驚き御
覽ずれば。」又調子おさへて。「早御肌衣も紅に染みて。目も當てられ

ぬ有様なり。」又聲を低めて。「其時義朝。何とて自害しけるぞと仰せ
られしかば。」更に低く。「朝長息の下より。」これより節にて。「さん候
都大崩れにて膝の口を射させ。既に難儀に候ひしを。馬にかゝり是
までは参り候へども。今は一足も引かれ候はず。路次にて捨てられ
申すならば。犬死すべく候。たゞ返すく御先途をも見届け申さて。
かやうに成り行き候事。さこそゆひかひなき者と。思召され候はん
ずれども。道にて敵に逢ふならば。雑兵の手にかゝらん事。餘りに
口惜しう候へば。是にて御暇たまはらんと。」地「これを最期の御言
葉にて。事切れさせ給へば。義朝正清とりつきて。歎かさ給ふ御有様
は。よその見る目も。あはれさをいつか忘れん」と。語り終りて打
ちしをる。此ところにあはれなる文句なほありて餘情を添ふ。所作
もなき處なれど。僧も女も袂しとゝにぬらす有様。思ひやられて感
深し。

「かくて夕陽影うつる」と脇正面の方を西の空の心にてながめやり。
 「雲たえくくに行く空の」と仕手柱にくつろぎ。「青野が原の露分け
 て」と右の方に心をつけ。「かの旅人を伴なひ」とワキへ向ひ。「青墓
 の宿に歸りけり」と大小前へ行きて宿に歸りたる心を示す。ワキは
 立ちたるのみにて同道したる心なり。
 シテはワキに向ひ。「見苦しく候へども。暫く是に御逗留候ひて。朝
 長の御跡御心静に吊ひ參らせられ候へ」といひ。ワキ答へて後。更
 に橋掛の方へ向ひ。勝手の方の者共を呼ぶ心にて。「誰かある罷り出
 て、御僧に宮仕へ申し候へ」と言ひ捨て、中入す。ツレも皆中入す
 るなり。

中入

ワキはアヒを呼び出だし。「此所にて朝長の最期の有様御物語り
 候へ」といへば。アヒ正面に向ひて語る。

アヒのカ
タリ

「さる程に朝長の子細と申すは。都大くづれとも申し又待賢門

の夜軍とも申し候。義朝は待賢門の夜軍に打ち負けさせ給ひ。
 何れも御一門江州を御心がけあつて御のきなされ候。然れば
 義朝は此宿の長者を御頼みあつて。此處に御着なされ候。又
 嫡子悪源太と申すは。是も江州まで御供ありて御のきなさる
 るが。敵あまりさしらく候ゆゑ石山寺へ御忍び候を。よき案
 内者をもつて生捕り。是は都にて誅せられ給ふと承る。只今
 御尋ねなされ候朝長は。手勢百ばかりにて敵陣をさりぬけ。
 上京をさして落ちさせ給ひて。せんぞくが嶽へ御のき候處に。
 横川の法師いであひさんくんに暇ひなされ。朝長は御手を負
 ひたまひ此處まで落ちのび。是も長者を御頼みなされ候。長
 頼まれ申しいろくいたはり申され候。それより義朝は野間
 のうつみへ御のきあらうずるとの御事にて。朝長にも御供あ
 りと仰せらるれば。朝長仰せらるゝは。我はいたてを負ひ申
 能のしかり 六の巻

し候間。路次にて雑兵の手にかかり。末代に名をくたし申さんより。こゝにて御腹切り給はうずると仰せられしを。義朝いろく仰せられ御留めなされるれば。即ち領掌なされ。さて義朝御寝なされ候折節。朝長は腹一文字にかき切り。高聲に念佛を御唱へなされ候を。義朝念佛の聲におどろき御出であつて。いろく御看病なされ候へども。遂に空しくなり給ひ候。義朝それより内海へのき給ひ候が。それも遂にはたるみの御湯殿にて御腹切り給ひたるよし承り候。朝長は一夜長者御宿を参らせ候へば。いたはしく存じ。土中につきこめ香花灯明劣らず参らせられ候。今日に至るまで我等如きに申し付けられ。御墓の掃除仕候。

と語れば。ワキ御物語承り涙を流し申し候。朝長の御跡を吊らひ申さうずるにて候」といひてアヒは引きワキは正面直す。

アヒ濟みて佛事を始むる心にて。ワキ「さても幽霊朝長の。佛事は様々多けれど。も。」ツレ「取り分き亡者の尊み給ひし。」ワキ「観音懺法讀み奉り。」同吟「聲滿つや。法の山風月更けて。光やはらぐ春の夜の。眼を覺ます鈸鼓。時も移るや後夜の鐘。音すみわたる折からの。御法の夜聲感涙も。浮むばかりのけしきかな。〜」と。歌ひ終りて出端となりシテ出づ。此出端のところ。「懺法」といふ習になる。特に太鼓の秘傳にて。打方も調子もかはるといふ。

後シテ舞臺に入りて開き。「あら有難の懺法やな。」云々と歌ひ。「心耳を澄ませる玉文の瑞風。感應肝に銘ずる折から」と。角取りて廻り。「あら尊との吊ひやな」とワキへ合掌す。

それよりワキとの問答さま〜ありて。ワキ「誠の姿か。」シテ「まぼろしかと。」ワキ「見えつ。」シテ「隠れつ。」ワキ「面影の」と向き合ひ。「あれはとも。言はゞ形や消えなまし」と据拍子ふみ。「消えず



秀忠

は如何て燈を。背くなよ朝長を。共に憐れみて深夜の」と正面出て、
 開き。「月も影そひて。光陰を惜しみ給へや」と。ワキの前へ行き。
 左の袖かへしてワキと向き合ひ。左へ廻り仕手柱にて小廻し。「御法
 を説かせ給へや」と開く。

クリになりて真中へ行き床几にかゝり。サシを歌ひ。クセになり
 て。嫡子悪源太義平は石山寺に籠り居たりしが。遂に捕へられて
 殺され。三男兵衛の佐頼朝は彌平兵衛が手に渡りて。是も都へ生
 捕られ。父義朝は野間の内海へ落ちゆきて長田を頼みしに。いひが
 ひなくも力と頼みし長田のために討たれり。かゝる定なき人心の
 世の中にも。此宿のあるじは女人の身ながら頼まれて。落人に一夜
 の宿を貸したるのみか。かやうに亡き跡までも吊ひくるゝとは。そ
 もくいつの世の契ならんと。朝長の語りて喜び謝する意味の文句
 あり。かく吊ひくるゝ志の深さによりて。朝長が後生をも御心やす

く思召せとワキに言ふをもてクセのトメとし。打切にてロンギとなる。

ロンギ

地「そもく修羅の苦患とは。いかなる敵に合竹の。」シテ「此世にて見し有様の」と扇ひらき。地「源平兩家。」シテ「入り亂る。」地「旗は白雲紅葉の」とさしまはして見。「運の極めの悲しさは。大崩れにて朝長が」と長拍子ふみ。「膝の口を筒深に射させて」と。扇たみ左に持ちて。矢の心にて左の膝に立て。「馬は頻にはねあがれば」と拍子二つ踏み。「鎧を越してあり立たんとすれども」と。少し立つやうにして。「難儀の手なれば一足も引かれざりしを」と。又腰を附け。「氣替にかきのせられて。うき近江路を凌ぎ來て此。青葛に下りしが」と。立ちて正面へ出て。「雑兵の手にかゝらんよりはと。思ひ定めて腹一文字に。かき切て其まゝに」と。下に居扇逆に取り。左より右へ腹かき切る形をなし。「修羅道に遠近の」とワキへあしらひて

立ち。左へ廻り。「なき跡とひてたび給へ」と。ワキへ合掌して例の通り拍子ふみとむる。

大原御幸

作物 大蓬屋 青葛を巻
きつかす

シテ 建禮門院(女院)

増 花帽子 前は白練着流 後は此上に水衣 数珠 花籠

ツレ 大納言局

深井 花帽子 無地熨斗着流 数珠 後には要木炭

ツレ 阿波内侍

大納言局に同じ 但し要木炭はなし

法皇 後白河院

直面 花帽子 白練 八藤指貫 白水衣

クマウ 腰帶 扇

龍のしなり 六の巻

ワキ 萬里小路中納言

風折烏帽子 厚板 大口 狩衣 腰帶 小サ刀 扇

ワキヅレ(大臣) 官人

前折烏帽子 厚板 大口 狩衣 腰帶 扇

輿かき二人

厚板 大口 腰帶

建禮門院は御名を徳子と申し。高倉天皇の中宮なりしが。安徳天皇を奉じ。平家の一門と共に西海に落ちゆき給ひしに。壇の浦の戦にて。帝と共に入水し給ひしを。源氏の武士に助けられ。再び都に歸りおはしまして後は。浮世を厭ひ。大原の寂光院といふに籠りおたまひしを。後白河法皇御とぶらひの爲め御幸ありて。其時の御物語をまのあたり聞かせ給ふ事を作れる能なり。シテの門院といひ。ツレの法皇といひ。唯ならぬ御上を作りた

作物いづ

る能なるが上に。すべて哀傷を旨としたれば。位しづかに沈みたる調子なるべきは勿論なれども。あまり隠微に失して老人めきたらんも然るべからじ。門院この時の御年三十にて渡らせ給ひし事を思ふべきなり。太鼓なし。季節は四月。地は山城。唯子方地謠すべて着座し終ると。後見二人にて作物を持ち出で。大小の前に据え置く。作物は大薬屋にて。青蒿を四本の柱より軒端まで這ひ纏はせ。引廻かけて出だせり。シテと二人のツレとは此中に入りて居るなり。

大臣名の

ワキヅレ出でし。「是は後白河の院に仕へ奉る臣下なり」と名のり。女院の御來歴を委しく述べて。大原の寂光院におはします事と。法皇の御幸あるべき事とをいひ。「御幸の山路をも申し付けばやと存じ候」とて。「如何に誰かある」と狂言を呼び出だし。「大原へ御幸あるべきなれば。行幸の道をも作り其清めを仕り候へ」と言ひ付けて。

出テ歌ひ

ワキゾレも狂言も入る。
 此狂言とモンダイの間に引廻るゝと。真ん中には尼姿なるシテ床
 凡にかゝり。其左には大納言の局。右には阿波の内侍。同じく尼姿
 にて下に居。局の前には花籠を置きたり。
 シテは静に「山里は物の淋しき事こそあれ。世の憂きよりは中々に」
 と歌ひ出し。是より三人同吟にて。「住みよかりける柴の局。都のか
 たの音づれば。間遠に結へる色垣や。うき節しげき竹柱。立居につ
 けて物おもへど。人目なきこそ安かりけれ」と。寂光院の人里遠き
 さまを歌ひ。下歌になりて。「折々に心なけれど訪ふものは。」上歌に
 なりて。「賤が妻木の斧の音。く。梢の嵐猿のこゑ。これらの音な
 らては。正木の葛青つゝら。来る人稀になりはてし。草顔淵が巻に。
 しげき思ひのゆくへとて。雨原憲が扇とも。うるほふ袖の涙かな。
 く」と。淋しき御住居せさせ給ふやうになりたる御心の悲しみを

申入

歌ふ。歌ふにも心持ある處にて。聞く人もおのづから袖をうるほし
 ぬべし。此下歌上歌は。地にて歌ふ事もあり。
 シテは「うるほふ袖の」と打ちしをりたりしが。その手をあろし。
 「如何に大納言の局」と呼び。「上の山に上り櫓を摘み候べし」とい
 ふと。局はシテに向き。「わらはも御供申し。妻木殿を折り供御にそ
 なへ申し候べし」と答ふ。シテ「喩は便なき事なれども。悉達太子
 は淨飯王の都を出て。檀特山の險しき道を凌ぎ。菜摘み水汲み薪」
 と。釋尊の古事を引きて歌ひ出し。地に受け取りて。「とりくさま
 く。に難行し。仙人に仕へさせ給ひて。遂に成道なるとかや。我も
 佛のためなれば。御花籠とりく。猶山深く入り給ふ。く」と。
 此地の謠の内に。シテは作物を静に出で。局も同じく出で、花籠を
 両手にてシテに渡し。二人上の山に上りゆく心にて。しづくくと中
 入す。

一聲になりて。法皇輿かきを左右にし。輿の作物を差し掛けさせつゝ出て。ワキは其跡に従ひて舞臺に入り。眞中に立ち並び。一同正面にて。「分けゆく末も深見草。く。大原の御幸いそがんと。ワキ輿かき同音に歌ひ。此地取の間に。法皇は輿を差し掛けさせながら橋掛にゆきて一の松に立ち居り。ワキは仕手柱の内より法皇に向ひて兩手をつき。「行幸を早め申し候間。大原に入御候」といひ。立ちて正面むき。「かくて大原に御幸なつて。寂光院のありさまを見わたせば。露むすぶ庭の夏草しげりあひて。青柳糸を亂しつゝ。池の浮草波にゆられて。錦をさらすかと疑はる。岸の山吹さきみだれ。八重立つ雲の絶間より。山時鳥の一聲も。君の御幸を待顔なり」と。ながめわたしたる景色を歌ひ。法皇また池水を正面の下の方に見わたし給ふ心ありて。「池水に汀の櫻ちりしきて。波の花こそ盛なりけれ」と詠じ出ださせ給ひ。地にて又。「古りにける。岩の隙より落ち

くる。く。水の音さへよしありて。緑蘿の垣翠黛の山。繪にかくとも筆にも及びがたし。一字の御堂あり。燈破れては。霧不斷の香を燒き。扇落ちては月も又。常住の燈をかゝぐとは。かゝる處か物凄や。く」と歌ふ。いよく其凄く淋しき古寺のさまは思はれたり。此謠の内に。法皇ながめ渡す形をなす。されど御輿の内よりなれば。餘りこゝかしこ見廻すべきにはあるまじ。ワキは作物の方を見て。「是なるこそ女院の御庵室にてありげに候。軒には葛朝顔はひかゝり。藜藿深く鎖せり。あら物凄のけしきやな」と歌ひ。更に「如何に此庵室の内へ案内申し候」といふ。内侍作物の内ながら「誰にて渡り候ぞ」と問ふ。ワキ「是は萬里小路の中納言にて候。」内侍「それはさて人目まれなる山中へは。何とて御渡り候ぞ。」ワキ「さん候女院の御住居御とむらひのため。法皇これまで御幸にて候。」内侍「女院は上の山へ花つみに御出にて。今は御留守

にて候」と聞きて。ワキは太鼓座の方へゆき。一の松なるシテに向
ひ両手つきて「御幸のよし申して候へば。女院は上の山へ花つみに
御出にて。今は御留守のよし候。暫く此所に御座をなされ。御歸を
御待ちあらうするにて候」と。此文句すみてワキは地の前にゆき下
に居。法皇は脇座にゆきて床几に掛かり。輿かきは輿を取りて大小
のうしろにくつろぐ。

内侍作物を出て、仕手柱の方にゆかんとするを。法皇見て。「やあ如
何にあの尼前。汝は如何なる者ぞ」と問ふ。内侍是を留め法皇に向
ひ下に居て。「げに、御見忘は御理り。是は信西が娘。阿波の内侍
がなれる果にて候」と。面伏せて耻ぢ入りたる心を見せ。「かく淺ま
しき姿ながら。明日をも知らぬ此身なれば。恨とは更に思はずさむ
らふ」と。又面下げて法皇に答ふると。法皇また「女院は何くに渡
り候ぞ」と問ひ。内侍「上の山へ花摘みに御出にて候」と答へ。法

法皇内侍
と問答す

後シテ出

皇「さて御供には」と問ひ。内侍「大納言の局」と答へ。「今すこし
待たせおはしまし候へ。やがて御歸にて候べし」といひて正面むき
居ると。アシラヒ鼓にて後シテ出で。次に大納言の局その跡より出
て来る。シテは花籠と数珠とを左右の手に持ち。局は妻木殿の作物
を左の手に提げたり。

二人とも途中に休らぶ心にて。橋掛に正面むきて立ち並び。シテは
静に「昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす。明日をも知らぬ此身
ながら。唯光帝の御面影。忘るゝ隙はよもあらじ。極重悪人無他方
便。唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り。二位殿一門の人々成等正
覺。なむあみだぶ」と。花籠持ちたるまゝ合掌し。「や」と常ならぬ
人聲のするを聞きつけて面上げ。「庵室のあたりに人音の聞え候」と。
局にいへば。局暫く是に御休み候へ」といひ。シテ花籠を前に置き
て床几に掛かり。局下に居る。

法皇の御幸を告ぐに

仕手柱先に居る内侍はシテの方を見て。法皇に向ひ。「只今こそあの
 唄づたひに女院の御歸にて候」といへど。二人とも尼姿にて同じや
 うなれば。「さて何れが女院。大納言の局は何れぞ」と問ふ。「花筐
 に掛けさせ給ふは。女院にて渡らせ給ふ。妻木に炭折り添へたるは。
 大納言の局なり」と内侍答ふ。この文句は平家物語より出てたれば。
 平家節にて歌ふを秘事とすといへり。
 かくて橋掛にゆき下に居て。「いかに法皇の御幸にて候」といふと。
 シテは内侍に向ひて聞き。「中々に猶安執の閻浮の世を。忘れもやら
 て浮名を又。漏らせば漏るゝ涙の色。袖のけしきも包ましや」と。
 正面直して打ちしをる。訪はれたるは嬉しけれど。思ひ捨てたる人
 間界に再び歸る心地するが悲しき心なるべし。
 「とは思へども法の人。同じ道にと頼むなり」と地になりて。法皇
 は同じく御法林にましますせば。法の友とて頼みまゐらする心を歌ひ。

シテ涙に
涙に明

ロンギ

「一念の窓の前。く」に。攝取の光明を期しつゝ。十念の柴の戸ば
 そには。聖衆の來迎を待ちつるに。思はざりける今日の暮。古にか
 へるかと。猶おもひでの涙かな」と。思ひもよぬ法皇の御幸を辱
 して。懐舊の情に堪へがたき心あり。古にかへるかとの文句にて又
 打ちしをる形をなす。内侍は此謠の内にシテの花籠を持ち。舞臺に
 かへりて地の前に下居る。

「げにや君こゝに。寂感のめぐみ末かけて。あはれもさぞな大原や。
 芹生の里の細道」と。シテも局も立ち舞臺の方へ靜に進み。シテは
 一の松あたりにて足をとめて正面むき。「暎の清水月ならて。御影や
 今に残るらん」と。下の方を細き流の心にて見まはす。趣ある處な
 り。

打切ありてロンギとなり氣を伸ばし面くわらりと直して。「春過ぎ夏
 も早。北祭の折なれば。青葉にまじる夏木立。春のなごりぞ思はる

シテ舞臺に入る

る」と歌ひ。地「遠山にかゝる白雲は。」シテ「散りにし花の形見かや」と。遠く高嶺の雲をながめやる心あり。地「夏草の茂みが中のそことなく。分け入り給ふ道の末」と而直し。シテ「こゝとてや。く。げに寂光の静なる。光の陰を惜しめたゞ。」地「光の陰も明らけき。玉松が枝に咲きそふや」と。松上の藤を見る心にて右を受けて。シテ「池の藤波夏かけて」と見渡す心あり。地「是も御幸を。」シテ「待顔に。」地「青葉がくれの遅櫻。初花よりも珍らかに」と。今少し上を見て。正面の方へ見廻し。「中々やうかはる有様を。あはれと寂慮に掛けまくも。」と静に舞臺に入り。「忝なしや此御幸」と法皇を見て。「柴の扇の暫しが程も。あるべき住居なるべしや」と。真ン中に行き。法皇に向きて下に居る。扇もシテの跡より舞臺に入り。地の前に行きて下に居る。

シテ「思はずも深山の奥の住居して。雲井の月をよそに見んとは。

かやうに思ひ出でしに。此山里までの御幸。返すくもありがたうこそ候へ」と歌ひて而伏せ。法皇「さいつ頃或人の申せしは。女院は六道の有様まさに御覽じけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふまじきに不審にこそ候へ」と尋ね。シテ「勅説はさる事なれども」と答へて。「つらく我身を案じ見るに」と正面へ直しながら歌ひて我身の述懐となり。それよりクリとなりサシとなりクセとなる。クセは六道のありさまを過去の西海の戦に比して語る心なり。たゞシテと法皇と時々向き合ふのみにて。別に形はなけれど。心持は十分なかるべからず。クセの留に至り。「見聞くも同じ人道の。苦しみになりはつ。浮き身の果てぞ悲しき」とシテしをる。

法皇之を聞きて。「誠にありがたき事どもかな。先帝の御最期のありさま。何とか渡り候ひつる御物語候へ」といひ。シテ「其時のありさま恥かしながら語つて聞かせ候ふべし」と立ち。正面へ少し出て

カタリ

て床几に掛かり。カタリとなる。

「其時の有様申すに付けて恨めしや。長門の國早鞆とやらんにて。筑紫へ一先おちゆくべきと一門申しあひしに。尾形の三郎が心ははりせし程に。薩摩方へや落さんと申し、折節。のぼり汐にさへられ。今はかうよと見えしに。能登の守教経は。安藝の太郎兄弟を左右の脇にはさみ。最期の供せよとて海中に飛んで入る。新中納言知盛は。沖なる舟の碇を引きあげ。甲とやらんにいたゞき」と。左の手にて頭を指し。「めのと手の家長が。弓と弓とを取りかはし。其まゝ海に入りけり。その時二位殿鈍色の二つ夜に。練袴のそば高く挟んで。我身は女人なりとて。敵の手には渡るまじ。主上の御供申さんと。安徳天皇の御手を取り船ばたに臨む。何くへ行くぞと勅説ありしに。此國と申すに逆臣おほく。かく淺ましき處なり。極樂世界と申して。めてたき所の此波の下にさむらふなれば。御幸なし奉らんと。泣く

く奏し給へば。さては心得たりとて。東に向はせ給ひて。天照大神に御暇申させ給ひて」と。以上はシテの語にて。地になり。「又十念の御ために。西に向はせおはしまし」と。しかと語る心にて法皇に向ひ。「今ぞ知る」とシテ語ひながら正面へ直し。「みもすそ川の流れには波の底にも都ありとはと。是を最期の御製にて。千尋の底に入り給ふ」と。段々進み來りし語。こゝにて頓挫し左の手にて打ちしをると同時に謠しづまり。「みづからも續いて沈みしを」と床几を立ち。打ちすわり面を伏す。海底に沈みたる心持なり。「源氏の武士とりあげて」と面直し。「かひなき命たすかり。ふたゝび龍顔に逢ひ奉り」と法皇へ向ひ。不覺の涙に袖をしをるぞ耻かしき」と。正面の方へ向きながら花帽子の下りたる處を兩手に持ちてしをる。正面むくは耻かしき心。しをるは悲しき心なり。「いつまでも御名残は如何で盡きぬべき」と。面直して法皇へ向ひ。



アキ踊る

庵室留

「はや還幸とすゝむれば」の返しより法皇立ち。「お輿を早め遙々と。寂光院を出て給へば」と。静に橋掛にゆくと。シテは立ちて「女院は柴の戸に」と歌ひながら。法皇の跡につき見送る心にて仕手柱の方にゆき。「しばしが程は見送らせ給ひて」と。作物の柱につかまりて。のびあがる心持にて更に遠く見送り。「おん庵室に入り給ふ」と。脇正面受け。しをり留にするなり。このトメ文句の如く作物の内に入りて留むるもあり。庵室留と稱へて秘事とする習なりといふ。

阿漕

前ジテ 漁翁

笑尉 尉髪 髪斗口 水衣 腰帯 扇さし竿持つ

後ジテ 漁夫の亡靈

能のしなり 六の巻

瘦男 黒頭 鬘斗目 腰篋 白水衣 扇さし網持つ
ワキ 旅人 流儀によりては旅僧

紫和上下 扇 僧の時は角帽子に鬘斗目水衣

アヒ 處の人

狂言上下 扇

阿漕が浦は伊勢大神宮の御膳調進の處なれば殺生禁断なるを。

忍びくりに夜々網を入れる、海人ありしが。處の法とて此浦の沖に沈められて死したり。その亡靈きたりて旅人に言葉をかはしたる物語を作れるなり。太鼓あり。季節は秋。地は伊勢。

ワキ次第にて出て。「心づくしの秋風に。く。本の間まの月を少なき」と歌ひ。地取にて正面むかひ。「是は九州日向の國のものにて候。我われいまだ伊勢太神宮に参らず候ほどに。只今思おもひ立ちて候」と名のり。道行みちゆきすみて後。「急ぎ候程に。是は早伊勢の國阿漕が浦に着きて候。

次第にてワキ出づ

暫く人を相待ち。所の名所をも尋ねばやと思ひ候」といひて。脇座わきざに着く。

一聲いちせいにてシテ出て舞臺に入る。釣竿つりざなをかたげたり。仕手柱ししてばしら先に立ちて。「波なみならで。乾かす隙ひまもなき海人衣うみひとえ。身の秋いつと限らまし」と歌ひ。サシになりて。「それ世を渡る習なひ。我一人われひとりに限らねども。せめては職しやくを營いとなむ田夫でんぷともならず。かく淺ましき殺生ころしやうの家に生れ。明暮あきくれ物の命を殺す事の悲しさよ」と面伏せ。詞にて「つたなかりける殺生ころしやう生なまかなとは思へども。浮世うきよのわざにて候程に。今日も又釣つりに出で候」と竿ざなおろして引きずり持つ。

一聲にてシテ出づ

ワキと問答す

ワキは之を見つけて處の古歌などの問答をなし。「げにや名所なごころ舊跡きうせきに。馴なれて年経としをへば心なき」。シテ「海人のたく藻もの夕烟ゆふけむり。」ワキ「身をたくべきにはあらねども。」シテ「住すまめば所ところによる波の。」ワキ「音もかはるか。」シテ「聞き給へ」と。詰足つみぞして初同はつどうとなり。「物の名も。處に

初同

よりてかはりけり。く。難波の蘆の浦風も。こゝには伊勢の。萩の。音をかへて聞き給へ」と。正面へ出て、足留めワキへ向き。「藻鹽焼く。烟も今は絶えにけり。月見んとての海人のしわざにと。ゆるされ申す海人衣。敷嶋によりくる。人なみに如何で漏るべき」と。角取り廻りワキへ開き。阿漕が浦の謂れを物語れといはれて真中へ行き。竿下におき下に居て語り出だす。「總じて此浦を阿漕が浦と申すは。伊勢太神宮御降臨より此かた。御膳調進の網を引く處なりされば神の御誓によるにや。海邊のうろくづ此處に多く集まるによつて。浮世を渡るあたりの海士人。此所にすなどりを望むといへども。神前の恐あるにより。固く戒めて之をゆるさぬ所に。阿漕といふ海士人。業を望む心の悲しさは。夜々忍びて網を引く。暫しは人も知らざりしに。度重なれば顯はれて。阿漕を戒め所をも替へず。此浦の沖に沈めけり。」それより文句さまくありて。「阿漕の責も隙

シテ語り
いだす

なくて。苦しきも度重なる。罪とむらはせ給へや」とワキに向ひ合掌す。

「耻かしや古を。語るもあまりげに」と面伏せて正面直し。「憲清と聞えし。その歌人の忍妻。あこぎくといひけんも。責一人に度かさなるぞ悲しき」と打ちしをる。是は戀の心を引き來りて。我身の罪の露顯せし事を。悲しみいへる心なり。

ロンギ

ロンギになりて。「日も夕暮の汐烟。立ち添ふ方や漁火の」と。釣竿を持ちて立ち。シテ「影もほのかに見えそめて」と。右の方受けて沖なる漁火を見わたし。地「海邊も晴るゝ村霧に」と正面直し。シテ「すはや手繰の」地「網の網」と。竿に巻き附けてある糸を左の手にて解き。「くりかへしく」と。二度ほど糸を竿に付け直に解きて。「浮きぬ沈むと見しよりも」と。竿兩手に持ちて右へ廻り。「俄に早手吹き。海づら暗くかきくれて」と。面つかひて忽ち變る海上の

けしきを脇正面に遠く見渡し。「敷波も立ち添ひ。漁のともし消え失せて」と。見ながら正面へ出て。「こはそも如何にと」と竿を下へ打ちつけ投げ捨て。「さけぶ聲の」と跡に下り兩手を耳にかざして聞く心をまねぶ。詠にも形にも緩急ありて變化おもしろき處なり。「波に聞えしばかりにて」と静に右へ廻り。仕手柱にて開き。「あととはかもなく失せにけり」と中入す。

中入

アヒ

ワキは「當浦の人の渡り候か」とて呼び出だし。阿漕が浦の謂れを語つて聞かせといへば。アヒは真中にて正面に向ひ語り出だす。「先はや此所は伊勢の國阿漕が浦と申し候。總じて阿漕と申すは人の名にて候。又當浦と申すは昔より大神宮御光臨このかた。御膳調進の網を引く處にて御座候。然るによつてあたりの人網をおろしたきよし申し候へども。神前のおそれにより戒め給ひ。堅く殺生禁断の御事にて候を。阿漕と申す海士人。

よるく忍びて網を引き候を。しばく人も存ぜず候が。あまりに事しげく網をおろし申すによつて。ある時此處の者見付け。網を引くをとらへさんくにいましめ。即ち所をもかへず。此浦の沖へ船に乗つて一間ばかりに簀をあみてくると巻き。四所五所結ひ沈め給ひて候。殊の外神罰を蒙り申して候。さやうの子細によつてある古き歌にも。伊勢の海阿漕が浦に引く網も。度かさなればあらはれずるとやらん御座候。又六帖の御歌にも。逢ふ事も阿漕が浦に引く網も。度かさなれば顯はれやせんと。かやうによみ給ひたるよし承り及びて候。最前も申す如く委しき事をば存ぜず候。先づ我等の承り及びたるは此分にて御座候が。さて只今は何と思しめして御尋ねなされ候ぞ。

とワキに向ひて語り終ると。

ワキ「御物語祝着申して候。是は筑紫がたの者にて候が。始めて参詣の者にて候が。此浦にて何となく古への歌などを口ずさみ候へば。何國ともなく老人の來り。聲詞をかほしいるく歌物語などを申されて候程に。不審をなし候へば。御身の物語の如く語り。其後行方しらずなりて候。あまりに不審に存じ。さてお事に尋ね申す事にて候。

アヒ答へて。

是は「奇特なる事を仰せられ候物かな。某推量仕り候に。御附たつとくましますにより一句をも聴聞申し。一部をも伺ひ申し度く存ぜられ。彼あま人の幽靈かりに顯はれ聲詞をかほし給ひたると存じ候。末は御急ぎの旅にて候とも。暫く此所に御逗留なされ。彼あま人の跡を御とぶらひ候はゞ。重ねて奇特を御覽ぜられうずると存じ候。ワキ「我等もさやうに存

じ候間。御經をよみ吊らひて其後参宮申さうずるにて候。アヒ「近頃ありがたう候。

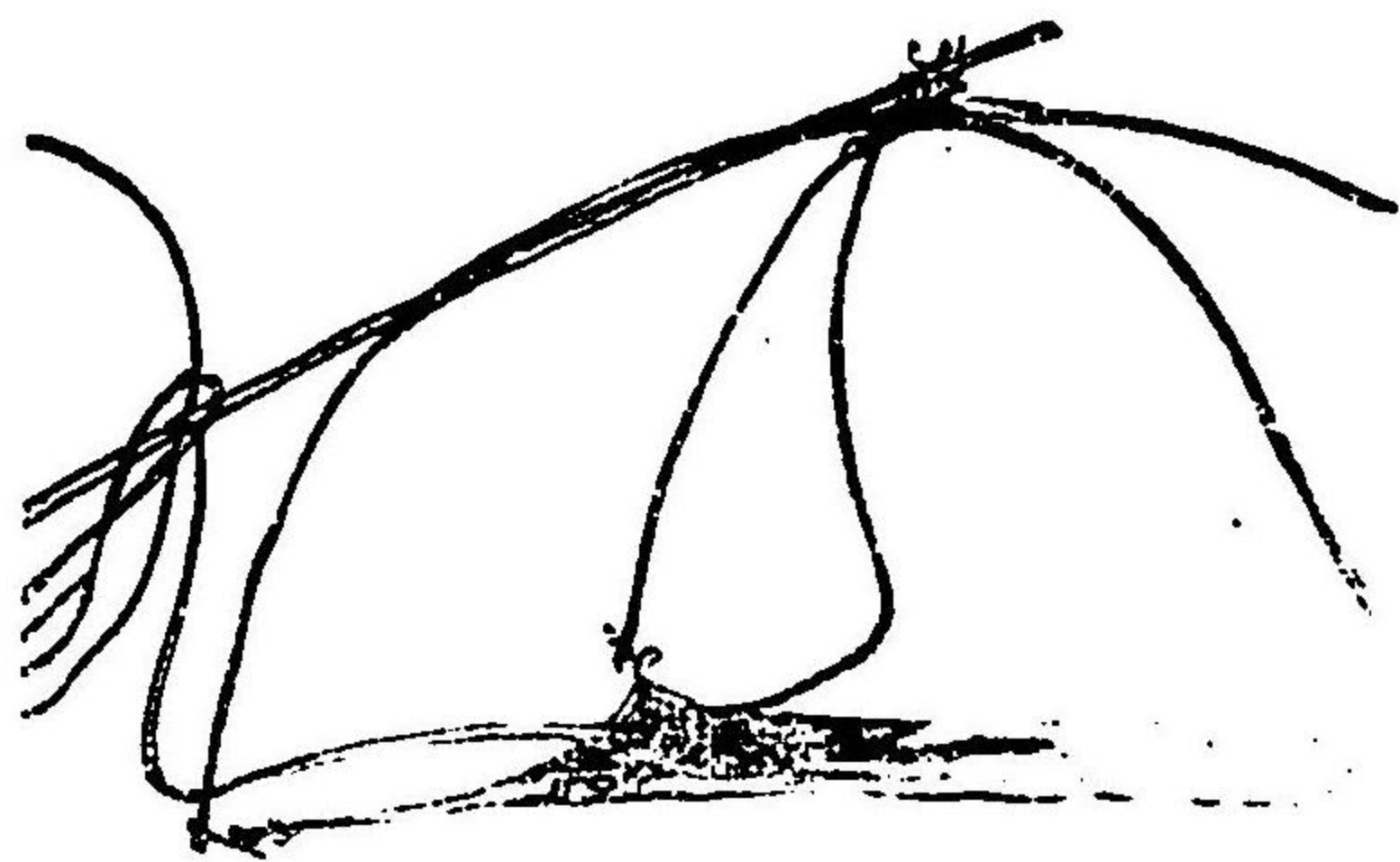
といひて引く。

出端にて
後シテ出

ワキの待謫すみで出端になり。後シテは大きな四つ手網に綱つけたるをかたげて出で。一の松に立ち正面むきて。「海人の刈る葎に住む虫の我からと。音をこそ泣かめ身をば恨みじ」と歌ひ。而少し伏せて述懐する心あり。「今宵は少し波荒れて。御膳の簀の網はまだ引かれぬよなふ」と。正面を海上の心にて見渡し。「よき隙なりと夕月なれば。宵よりやがて入汐の。道を替へ人目を。忍びく引く綱の。沖にも磯にも船は見えず」と。道を替へて忍び行く心。「沖にも磯にも」とあちこち見まはし船のあらざるを確と見定むる形などありて。いよく決心し船乗り出だす心持にて。「唯我のみぞあごの海。阿漕が沙木こりもせて」と。歌ひながら舞臺に入り。なほ執心の綱

カケリ

置かん」と仕手柱より正面先へ出て。網おろし前に置きて下に居。カケリになりて立ち。脇正面の方に魚の群れ来るさまなど見る心ありて丁寧ていねいに網を見置き。静しずかに橋掛はしがかりにゆき一の松いちのまつに立ちて。幕際まくぎわの方より正面に又舞臺まいたいの方に魚の行くをながめ。頭取りかしもとりて網の方を見込み。それより大小たひちま前まへの方へ左の手にて魚を追ひゆき。又の方より正面の方へ追ひゆき。両手にてしかと網に追ひ入るゝ心にて打合うちあひをなし。下に居て網の綱なまを両手にて持ち。網の中に心を配りて。「伊勢いせの海。清きよき清きよのたまたまくも」と歌ひ。地「訪まをふこそ便たすり法の聲こゑ。」シテ「耳みみには聞きけども猶なほ心



には」と網の中を見まはし。地「唯罪ただつみをのみ持もつて猛火まうかとなるぞや」と。だんくくに網なまをたぐりよせ網なまの四よつ手てをつかみて後へ投げ捨て。立つて跡あとへ下り。「あらあつや堪たへ刺さや」と扇あふぎひ



キ

らきてイウケンす。今までは娑婆に居たりし時の網引くさまを學びて樂しかりしに。俄に地獄の苦しみと變じたる有様なり。魚の追方。網の投方。口傳の多き處なるべし。打切より和吟になりて。「丑三つ過ぐる夜の夢。見よや因果のめぐりくる」と右を受け。「火車に業積む」と。招扇して車に物を積む形をなすもあり。梅若實は霞の扇して出てたるをも見たり。「かず苦しめて目の前の」と指し廻し。地獄も誠なりげにげに。恐ろしのけしきや」と。扇と左の手と打合せ。驚きたる形をなす。「思ふも恨めし古の」とシテ歌ひ。其返しより拍子踏み。刻拍子などあり「なほ執心の心引く網の」と網引き上ぐる心にて釣扇をなし。「手なれし鱗。悪魚毒蛇となつて」と。さしわけして右へ廻り。「紅蓮大紅蓮の」と拍子ふみ。「氷に身を痛め」と角へ指しゆきて。「骨を碎けば」と扇巻き込みて胸に當て。「叫ぶ息は」と伸びて「焦熱大焦

熱の」と左へ廻る形なるが。近年梅若の舞臺にて觀世鐵之丞のを見るに。誰もする同じ形ながらも。一種異様の凄みありて。其伸びたる時の如きは。さながら骨を碎かれて叫ぶが如く。黒頭も水衣も盡く焰となりて燃えあがるかと覺ゆるばかりなりしは。いつまでも幻となりて眼前を離れず。上手のわざは不思議なるものかな。かくて左に廻り來りて。「ほのほ烟雲霧」と頭取り見まはすもあり。又さしわけするシテもあるやうなるが。梅若實が此春したりしは。「ほのほ。けむり。くも。きり」と一つく分けて歌はせ。左へ右へ左へ右へと面つかひたり。其面の前には。忽に焰。忽に烟。忽に雲。忽に霧と。なびきつ消えつする心地して。これも去られぬ記憶とぞなりぬる。かくて「立居に隙もなき」と膝つきてグワツシをなし。立ちて仕手柱先よりソキへ。「あこぎが浦の罪科を。助け給へや旅人よ」と胸ざ

しゝて出て。「助け給へや旅人として。又波に入りにはけり」と。腦座の方より仕手柱へ乗り込み。きりりと廻り。扇顔にあてゝ下に居。返しに立ちて拍子ふみとむる。扇顔にあつるは海底に入りたる心ぞかし。

善界

是界とも是我意とも書く

作物 車

前ジテ 山伏(善界坊)

直而 兜巾 大格子 大口 水衣 蓑懸

腰帶 小サ刀 扇 イリタカ数珠

ツレ 山伏(太郎坊)

シテに同じ

後ジテ 天狗(善界坊)

大慈見 赤頭(白頭にも) 大兜巾 厚板 半切

狩衣 腰帶 羽団扇

ワキ 僧正

沙門帽子 厚板 大口 紫水衣 クワワ 腰帶 数珠

ワキヅレ二人 從僧

角帽子 厚板 大口 水衣 腰帶 数珠

アヒ 能力

能力頭巾 鬘斗口 狂言袴 脚半 腰帶 文挾に文

唐土の天狗の首領善界坊といふもの。我國の佛法繁昌なるを妨害せんとして遙々渡り來り。愛宕山に住む我國天狗の主領太郎坊を音づれて。もろともに目的を達せんと謀りつるに。比叡山飯室の僧正に降伏せられて。翼も地に落ち。もろくも敗北して歸る事を作れり。天狗物の中にも鞍馬天狗は牛若の師たる僧正坊をあらはしたるなれば重く。車僧は初こそ慢心の氣焔を張りた

れども。忽に論破せられて降参せられたるなればさほどにあら
ず。大會は名もなき天狗ながら釋尊になりすましたる心にてや
ゝ重く。この善界はもろくも降伏せられたるながらも。唐土の
首領といふ資格をば思はざるべからず。同じきやうにてそれを
れ趣を異にしたるを味ふべし。太鼓あり。季節知られず。地は
山城。

シテ次第
にて出づ

次第にてシテ先づ出で。仕手柱先にて足とめ。大小の方ひきて詰め。
打切きゝて歌ひ出だす。「雲路を凌ぐ旅の空。〱。出づる日の本を
尋ねん。」是より出立せんとする心を歌へるなり。地取ありて正面直
し。「是は大唐の天狗の首領善界坊にて候。さても我國において。育
王山青龍寺。若般臺に至るまで。少しも慢心の輩をば。皆我道に誘
引せずといふ事なし。誠や日本は。粟散遍地の小國なれども神國と
して。佛法今に盛なるよし承り及び候間。急ぎ日本に渡り。佛法を

若セリフ

ツレを呼
び出だす

舞臺に入

も妨げばやと存じ候」と名のり。道行ありて日本に渡る心を聞かせ。
「急ぎ候程に。是は早日本の地に着きて候。まづ承り及びたる愛宕
山に立ち越え。太郎坊に案内を申さばやと存じ候」といひて橋掛に
ゆき。一の松にて正面をきつと見。「是は早愛宕山にて有りげに候」
とて。「山の姿木の木立」と見上げ。「是こそ我等が住むべき所にて候
へ」といひて幕の方に向ひ。「いかに案内申し候」といへば。ツレ幕
上げて「誰にて渡り候ぞ」と出で来る。シテは善界坊なるが申し談
ずべき子細ありて來れりといひ。ツレは先づ庵室へ御入り候へとい
ひて入り替り。舞臺に入りて。ツレは地の前に。シテは眞ん中に向
き合ひて安座す。庵室の内にて親しく閑談せんとするさまなり。
ツレまづ「さて只今は何のために御出でにて候ぞ」と問ふ。シテ答
へて。「さん候只今参る事餘の儀にあらず。我國において。育王山青
龍寺。般若臺に至るまで。少しも慢心の輩をば。皆我道に誘引せず

といふ事なし。誠や日本は。小國なれども神國として。佛法今に盛なるよし承り候間。少し心にかゝり。遙々これまで参りて候。同じくは御心を一つにして。自他の本意を達し給へ」と誘導す。ツレ「さてはやさしくも思召し立ち候ものかな。それ我國は天地開闢よりこのかた。まづ以て神國たり。されば佛法今にさかんなり。まづ〱間近き比叡山。あれこそ日本の天台山候よ」と脇柱の方むきて比叡山を見わたし。「心のまゝに伺ひ給へ」とシテへ向ひて教ふ。かくて謠さま〱ありてクセ濟みロンギとなる。ツレ「かくては時刻うつりなん。いざ諸共に立ち出でよ。比叡の山邊のしるべせん」と二人とも立ち。シテは仕手柱に行き。シテ「法のため。今ぞ愛宕の山の名に。頼みを懸けて思ひ立つ。雲の掛橋うちわたり」と正面に開き見上げて拍子一つ踏み。地「我名やよそに高雄山。東を見れば大比叡や」と。脇柱の方見上げて開き。シテ「横川の杉の梢より。」

ロンギ

來序にて
中入す

地「南につゞく如意が嶽」と謠早くなりて。右に指しゆき。「鶯のお山の雲や霞も。嵐と共に失せにけり」と。仕手柱にて小廻し開き。返しに一の松あたりまで行き。來序になりて中入す。ツレも入るなり。

能力アロ
出づ

シテもツレも入り暮おりて末社來序とかはり。能力文挾に文を挟みたるを捧げて出づ。卷數の心なり。名乗座に立ちて。

かやうに候ものは。比叡山飯室の僧正に仕へ申す能力にて候。只今これへ出づる事餘の儀にあらす。それ日本は小國といひながら神國にて。佛法繁昌して王位めてたき御國の御事なり。さる間大唐の天狗の首領善界坊。日本に渡り坊をなし申さうずるとて。はや此土に渡り。まづ愛宕山へ参り。太郎坊に案内を申されければ。太郎坊出であひ給ふ處に。かの善界坊申さるゝやうは。我等これへ参る事餘の儀にあらす。大唐にお能のしをり 六の巻

いて育王山青龍寺。般若臺に至るまで。ことごとく我儘に計らひ申すに。太郎坊は何とて我まゝに計らひ申されぬぞ。我等の参るは我黨に引き入れ申さんため。是まで参りて候。同じくは御心を一つにして。力を添へて給はり候へと申されれば。太郎坊の仰には。是までの御出にて候程に同心申さざる。まづ／＼あれに見えたるは比叡山と申して顯密兼學の所なり。まづ／＼都へ御出あり。御心のまゝに窺ひ御覽候へとて。さつと對面申されたる後。善界坊都にて色々の妨をなし申さるゝ間。勅使立つて僧正に早々御出あり。御祈禱なされよとの御事にて候程に。御車を早め給へども。まづ／＼一時も早く此卷敷を捧げ申せとの御事により。足をはかりに持ちて参らばやと存ずる。太郎坊などの愛宕山にまし／＼。都の事をよく御存じあつて。今まで何事も聊爾なる事をめされ

ぬに。今更善界坊が斯く申さるればとて。同心申さうとある儀はとかく落度かと存ずる。

といひて俄に驚き空をながめて。

いや颯風が吹いて來た。今の風が吹いて通つたれば行先が暗うて見え難い。是は善界坊が羽風にて有らう。命を失うては入ざるものぢや。只もどらう去りながら。自然お尋もあらば。此所までは参つたれども。行先が暗うて行かれいでもどつたというて給はり候へ」と。

道行人にいふ心にて引き返し入る。

アヒすむと脇座へ車の作物出で。一聲にてワキ及びワキヅレ出で。ワキは車の中に。ツレは車の左右に立ち。「勅を受け。我立つ柵を出てながら。急ぐも同じ名に高さ。大内山の道ならん」と同吟し。ワキ「かくてやう／＼大比叡を。おりつゝ行けば不思議やな。あれに

大べしに
出づ

イロへ

見えたる下り松の。三人同吟にて。「梢の嵐吹きしをり。く。雲と
なり雨となる。山河草木震動し。天にかやく稲光。大地に響く雷
は。肝魂をくらまかす。こはそも何の故やらん。く」と歌ひて。
ワキは床几にかゝり。ツレは左右に下に居る。
大べしになりて後ジテ出て。一の松にて。「そもく是は。大唐の天
狗の首領。善界坊とは我事なり」と開き。「あら物々しや如何に御坊。
今更何の觀念をかなせる」と。左の袖返しあしらひてワキを見。「そ
れ若作障即有一佛。魔境と説けり」と舞臺に入り。「あら痛はしや」
とワキへ開き。「欲界の。内に生まるゝ輩は」と歌ひながら角へゆき。
左へ廻り仕手柱にて小廻して開き。「不思議や雲の内よりも」と拍子
ありて。「これを不動と名づけたり」よりイロへとなる。
イロへは僧正を魔道に引き入れんと試むる一段にて。まづ角より廻
りてワキの前にゆき「つきめて見。それより橋掛にゆき三の松にて

シテアキ
に祈らる

舞働

キリ

袖かづきワキを見込み。位つまりてつかくくとワキの前へゆき。乗
込拍子ふみて左の袖返し。車の轅に其手を掛けてワキを見ると。ワ
キ「聽我説者得大智慧。うんたらたかかんまん」と咒文となへて數珠
おしむ。祈られてシテは跡へ下り。仕手柱にて兩手突き平伏する。
「その時御聲の下よりも。明王あらはれ出て給へば。こんがら制多
伽十二天。おのく降魔の力を合はせて。御先を拂つておはします」と。
僧正の咒文につき明王諸天のあらはれ出て給ふ心にて。シテは其文
句の意味を示し。羽團扇を横にして二つあをりながら出で。さして
右へ廻り。仕手柱にて小廻し。兩袖かづきて拍子ふむ。是より舞働
になりて。一段の處はワキの前へ乗込みてグワツシ。直にさして右
へ廻り。仕手柱にて小廻して留む。明王諸天と戰ふ心なり。
「明王諸天はさて置きぬ」と拍子一つ踏み。「東風吹く風に見れ
ば」と脇座の上を東方の心にて見。「山王權現」とシテ歌ひながら胸
能のしなり 六の巻



ざして聞き。「南に男山西に松の尾北野や賀茂の。山風神風ふきは
 らへば」と。正面の方より右の方へずつとさして廻り。更に羽團扇
 以て招きつゝ吹き拂形をして角の方へ廻りゆき。「さしもに飛行の翼
 も地に落ち」と。ソリガヘリして兩手突き平座をし。「方も視弓の
 八島の波の立ち去ると見えしが」と橋掛へゆき。「又飛び来りさるに
 ても」と兩イツケンして飛び来る翼をまねびながらワキの前にゆき。
 下に居て手を突き。「かほどに妙なる佛力神力。今より後は来るまじ
 と」と辭儀をなし居立ちてワキを見。「いふ辭ばかりは虚空に残り。
 いふ辭ばかり虚空に残つて」と。左の袖卷きて橋掛へゆき。羽團扇
 うしろへ投げ捨て、飛び廻り。袖かづきて留むる。白頭になると重
 くなると共にキリに緩急などありて諸流多少の趣かはれり。喜多流
 にては雲間之拍子とて音なしに拍子ふむ習ありといふ。

雲間の拍子

國栖

作物 船
て包廻むに

前ジテ 漁翁

笑尉 尉髪 鬘斗口 水衣加上 腰帶 扇 水棹

前ヅレ 老女

姥 姥髪 箔 水衣加上 釣竿

王子方 天武天皇

冠 箔 緋大口 狩衣 腰帶 扇

後ジテ 藏王權現

大飛出 赤頭 厚板 狩衣 半切 腰帶 扇

後ヅレ 天女

天冠 黒垂 箔 色大口 長相 扇

ワキ 供奉官人

厚板 大口 法被 腰帶 小サ刀 扇

トモ 従者

素袍上下 小サ刀

輿かき二人

モヤドゥ

アヒ二人

鬘斗口 狂言上下右の肩に 脚半 腰帶 小サ刀

一人は鉾 一人は可矢

天武天皇のいまだ大海人皇子と申し奉りし頃。大友皇子と不和にならせ給ひ。都を落ちて吉野山に入り給ひしに。藏王權現かりに御身を漁翁夫婦と現じ。夏箕川の鮎を焼きて供御に奉り。大友皇子の兵追ひ來りて御ゆくへを搜索したりしかど。船の中に隠し奉りて助け申し。此御心勞を慰め奉るとて天女に舞を奏能のしかり 六の巻

せしめ。遂に本體をあらはして未來の天武の聖體を守りたまふ
事を作れる能なり。太鼓あり。季節は春。地は大和。

子方ヲキ

一聲にて王なる子方は輿かき二人に輿の作物を差し掛けさせて出て。
ワキ其あとにトモ又其あとに附きて出て。舞臺に正面むき立ちて同
吟に歌ふ。「思はずも。雲井を出づる春の夜の。月の都の名残かな」
と。それよりサシになりて。ワキ「神風や五十鈴の古き末を受くる。
御裳溜川のおん流れ。やごとなき御方にておはします。」一同「此君
と申すに御譲りとして。天の日嗣を受くべき處に。御伯父なにがし
の連に襲はれ給ひ。都の境も遠田舎の。なれぬ山野の草木の露。分
けゆく道の果までも。行幸とおもへば頼もしや」と。君の供奉して
旅立ちたる謂れと。臣下の君に仕ふる真心とを述べ。「身を秋山や世
の中の。宇陀の御狩場よそに見て」と。下歌より道行の心になりて。
世が世ならば御狩などの御遊びもあるべきを。今は忍ばせ給ふべき

着せり

御身なれば。御狩場をもよそに見つゝ過ぎ給ふ悲しさをいひ。上歌
になりて。「牡鹿伏すなる春日山。く。みかさぞまさる春雨の。音
は何くぞ吉野川。よしや暫しこそ。花曇なれ春の夜の。月は雲井に
歸るべし。頼みを掛けよ玉の輿。く」と。吉野山に入り給ふよし
を歌ひ。今はかくまで落ちゆき給ふ御身なれども。遂には空晴れて
都に歸りおはすべき玉の御輿なるぞと。希望を抱きつゝ供奉し申す
心を漏らしたり。
謠すみて。ワキ「御急ぎ候程に。いづくとも知らぬ山中に御着きに
て候。まづ此所に御座をなされうずるにて候」とすわりて玉に向ひ
ていひ。王は脇座にゆきて床几に掛り。輿かきは引き。ワキとトモ
とは王の下に着席す。吉野山中なる老翁夫婦がすみかの心なり。
後見船の作物を持ちて出て。一の松の處に置く。船體は引廻にて包
みたり。橋掛を吉野川の心にしたるなり。

鼓のアシ
ラヒ出し
シテ出づ
シテ出づ
出ず

都のアシラヒ出しありてツレとシテと出て船に乗る。ツレは釣竿を
かたげ。シテは水掉を持つ。
シテ舞臺に向ひ脇柱の上を見て。「祖母や見給へ」とツレに向く。ツ
レ「何事にて候ぞ」とシテに向く。シテ又前の處を見て。「あの祖父
が伏屋の上に。紫雲の棚引いたるを拜まい給うたか」と問ふ。ツレ
「げに〜あたりに紫雲たなびき。たゞならぬ空のけしきやな」と
答ふ。シテ「あふ只ならぬけしき候よ。昔より天子の御座所にこそ。
紫雲は立つと申せ。もしも不思議に尉がすみかに。」ツレ「左様の貴
人やおはすらんと。」シテ「船さしよせて我家に歸り」と掉に手を掛
け船をよする形をなし。ツレも釣竿をおろし持ちて。「見れば不思議
やさればこそ」と王の方を見。シテも「王の冠直衣の袖」と王を見。
ツレ「露霜にしをれ給へども。」シテ「さすがまぎれぬ御装。」地「さ
もやごとなき御方とは。疑もなく白糸の。釣竿をさしおきて」と。

二人舞臺
に入る

ツレ船よりおりて竿を捨て。シテも同じく水掉すてい。二人とも舞
臺に入り。「そもや如何なる御事ぞ」と真ん中にゆきてワキに向ひ下
に居る。「かほど賤しき柴の戸の。しばしが程のおましにも。なりけ
る事よ如何にせん。あら忝な御事や。〜」と。二人又ワキに向
く。

供御の事
を謀る

シテ更に詞にて。「是はそも何と申したる御事にて候ぞ」と問へば。
ワキ「是は山ある御方にて御座候が。間近き人に襲はれ給ひ。是ま
で御忍びにて候。何事も尉を頼み思召さるゝとの御事にて候」と語
る。シテ「さては山ある御方にて御座候か。幸ひ是は此尉が庵にて
候程に。御心安く御休みあらうずるにて候」と引き受け申す事いと
かひくし。

ワキこゝに於て。「いかに尉」と呼び。「面目もなき申事にて候へども。
此君二三日が程供御を近づけ給はず候。何にても供御にそなへ候へ」

と。何をがな参らすべき食物はあるまじきかと頼めば。シテは「其よし祖母に申さうするにて候」と答へて。ツレに向ひ。「いかに祖母聞いてあるか。此二三日が程供御を近づけ給はずとの御事なり。何にても供御に奉り給へ」と謀る。ツレ「折節これに摘みたる根芹の候」と答ふ。シテ「それこそ日本一の事。我等も是に國柄魚の候。これを供御に備へ申さうするにて候」といひて。共に今日取りて歸りたる物どもを捧げんとす。

ツレ「祖母は餘りの忝なさに。胸うちさわぎ摘みおける。根芹洗ひて老が身も。心若菜をそろへつゝ。供御に備へ奉る」とワキに向ひ。「それよりしてぞ三吉野の。なつみの川と申すなり」と正面に直し。シテ「祖父も色こき紅葉を林間に焼き。國柄川にて釣りたる鮎を焼き。同じく供御にそなへけり」と。扇ひらき其上に載せたる心にて兩手に持ち。「吉野の國柄といふ事も。此時よりの事とかや」と。立

ちてワキの前へゆき。扇うつむけにしてワキの扇の上へ移す形をなし。「尊菜の羹鮎魚とても。是にはいかで優るべき」の謔の間に。ワキは王の前にゆき下に居て扇を兩手に持ち見すると。王も之を見る。此時御箸を觸れ給ふ心なり。かくてワキは座にかへり「まぢかく参れ老人よ。まぢかく参れ老人」と。右の手にてシテを指し。こちへと招く。

ワキ「如何に尉。供御の御残りを尉に給はれとの御事にて候」と。前の扇を左に持ちてシテに見すると。シテは扇ひらきてワキの前にゆき。御残りを受取りたる心にて兩手に持ち戴きて。子方に向ひ「あら有難や候」と面伏せ。さらば打ち返して給はらうするにて候」といふ。ワキ「そも打ち返して給はらうするとは。何と申したる事にてあるぞ。」シテ「打ち返して給はらうすると申すこそ國柄魚のしるしにて候へ」と答へて。ツレに向き。「いかに祖母。供御の残りを

鮎の段

尉じょうに給はれとの御事ごことにて候が。此魚は未だ生々いきいきと見えて候」と扇を前に出だして見る。ツレも「げに此魚は未だいきいきと見えて候」と見る。シテ「いざ此吉野川よしのがはに放はないて見う」とツレにいふ。ツレ筋なき事ことな宜よろひそ。放はないたればとて生きかへるべきかは」とシテに向く。シテ正面しょうめん直ただして。「いや／＼昔むかしもさる例たとひあり。神功皇后じんこうこうご新羅しんらを従へ給ひし占形うらながたに。玉島川たまじまがはの鮎あなを釣つらせ給ふ」と語り出づる心にてワキへ向き。「其如そのごとく此君このきみも。二たび都みやこに還幸くわんかうならば」と王に向ひ「この魚もなか生いきざらんと」と。扇あふぎ見て又ワキを見。「岩切いわきりる水みづに放せば」と扇左せんざに持ちて正面しょうめん先へ出で。返しにて扇あふぎうつむけ魚うしほを水みづに捨て。「さしも早瀬はやせの瀧川たきがはに」と面使おもつかひひて。目附柱めつけしらの方へ流れゆくさまを見まはし。「あれ三吉野みやよや吉瑞きよみづを。あらはす魚のおのづから」と左へ廻り。「生きかへる此占形このうらながた」と膝ひざ一つ打ちて喜よろこの心を表し。「たのもしく思召おもしめされよ」とワキに向き下に居て扇あふぎたゝむ。此魚このうしほを放す

一段を鮎の段と稱ふ。

早はや敷づみになりて。ワキ「いかに尉追手じょうおいてが掛かりて候」と敵かたきの攻め來らんとするを憂うれひていへば。シテは落着おちつききて「こなたへ御任せ候へ」と答へ。「いかに祖母おばあ。あの船舁ふねかいて來う。」ツレ「心得こころえ申し候」とて。二人橋掛はしかけにゆき。一の松いちのまつのうしろの欄干らんかんに立て掛けてあるを。ツレは前の方を。シテは後の方を持ちて舁かき來り。地ちの前まへへ舁かき先さきを正面しょうめんむけて据すゑ置き。王みを見ると王は立ちて船ふねの左の方に來り下に居ゐ。二人は船を横よこにして王の上にかぶせる形かたをなし。シテは之をうしろにして脇正わきただ面めんむきて座まし。ツレ其次つぎに座ます。王みを船の下にかくまひたる心なり。此時ワキとトモとははづして囃子はやし方かたのうしろにくつろぎ居る。

船の下に隠す

アヒ二人來る

大友皇子おほともみまの雑兵ざつへいに出で立ちたるアヒ二人。一人は鎌こを持ち。一人は弓ゆみに矢やつがひながら。「やるまいぞ／＼」とて舞臺まいだいに來り。「只今これ

能のしやり六の巻



八十一

國栖



美空

八十

へ見えだが。どちへやら見失うた。「誠に今の事ぢやが見えぬ。さりながらこゝは山谷のおほいどころぢや程に。随分さがしませ。」心得た。いや是に老人が居る。是に尋ねて見う。「急いで尋ねさせ。」
 「いかに老人。清見原の天皇はどちへ行かしましたぞ」と問へば。
 シテは「何清見原へ。清見原へならば此川下へ行け」と。わざと知らぬふりして清見原の道を教ふれば。「さて／＼こゝな老人は老いぼれてむさとした事をいします。清見原の天皇はどちへゆかしましたぞいやい」と迫る。シテ「さては清見原とは人の名よな。あら聞き馴れずの人の名や。其上此山は。都卒の内院にも醫へ。又五台山青龍山とて。もろこしまても遠く續ける吉野山。かくれがまさ所なるを。いづくまで尋ね給ふべき。すみやかに歸り給へ」といへば。
 「是は尤ぢや。其儀ならば戻らう」と一人はいふを。「まづ待たしませ。あの船をうつむけて置いたが心もとない。あの船の下を捜して

見う」と一人はいふ。「是は尤ぢや急いで捜しませ。」やあ／＼其船は何とてうつむけて置かしましたぞ」と問ふ。シテ「何と船が怪しいとや。是は乾す船ぞとよ」と辨ずるを。「たとひ乾す船なりとも。その船の下が心もとない。そこをのかしませ。其船の下を捜して見う」と。シテに向ひ言ひて捜しにかゝらんとするを。シテ「何と船を捜さうとや。獵師の身にては船を捜されたるも家を探されたるも同じ事ぞかし。身こそ賤しく思ふとも。此所にては翁もにつくき者ぞかし。孫もあり彦もあり。山々谷々の者ども出て合ひて」と。左の手にて左の方を指し。又右の手にて右の方を指し。「あの狼籍人を打ち留め候へ」と。手を叩き呼び出だす心にて打合をなす。之に恐れて臆病なる追手の兵は逃足をつかひ。「あゝ聊爾な事をなおしやつそ。追手の者は早歸るぞ。何と思ふぞ。かやうの所に長居して引目を追うてはなるまい程に。急いでのかう。」一段とよからう。「唯のけ

舟を起す

王シテ
向ひ謝す

く」といひて打ちつれ樂屋に入る。
ツレ立ちて。「なふ聞し召せ追手の武士は歸りたり」とシテに向ひ。
シテも「今はかうよと祖父祖母は」と立ち。ツレ「嬉しや力を」。シ
テ「えいや。」二人「えいと」と。二人にて船を持ち。「船引き起し尊
躰の」と取りのけて見ると。王出て來りて本の座に歸り床几に掛か
る。ツキもトモも笛の左より出て、其下に着座す。「御つゝがなく河
舟の。かひある御命。助かり給ふぞ有難き」と。シテもツレも其ま
ゝにて王を見。クリになりてシテは扇もちて大小前に。ツレはトモ
の次に座着く。船は後見持ちて入るなり。
王「されば君としてこそ。民をはごくむ習なるに。却つて助くる志」
とシテへ向く。シテも王に向き。「よしや世の中治まらば。命の恩を
報ぜん」と。繪言肝に銘じつゝ。夫婦の老人は。かたじけなさに泣き
居たり」と二人ともしをる。王もツキも皆シテに向く。

クセ

シテも
中入
天女出づ

クセになりて一同に直し。「さる程に更け静まりて物凄し。いかにと
してか此程の御こゝろ。慰め申すべき」とシテ王に向き。「しかも所
は月雪の。みよし野なれや花鳥の」と。シテもツレも立ち。シテは
仕手柱の方へ。「色音によりて音樂の呂律の調め琴の音に」と足をと
め。「峰の松風かよひくる」と。脇正面の方に音樂の聲を聞く心にて少
し出て。「天つ乙女の返す袖。五節の始め是なれや」と下羽になり。
シテもツレも静々と幕に入りて中入すると。又幕上げて立ちかはり
天女出て來る。前の如何にしてか此程の御心慰め申すべき文句を
受けて。王を慰めまゐらする心なり。
天女は舞臺に入りて下羽にて舞ふもあり。又は初段より樂になるも
あり。舞ひ終りて。「乙女子がく。その唐土の琴の糸。引かれ奏づ
る音樂に」と。左右打込など例の如く。「神々も來臨し。勝手入所此
山に。こもりの御前藏王とは」と。脇座の前にて大きく受け。仕手

能のしをり 六の巻

後ツテ歌
ひ出だす

柱際までゆき。後ツテの遙にあらはれたるを迎ふる心にて。幕に向
ひて雲の扇をし。シテ歌ひ出して地の前に座つく。

後シテは幕の内にて「王をかくすや吉野山」と歌ひ出し。地「すな
はち姿をあらはして」と附けて早笛となる。

此所は早笛ならずして謡の内に鬘斗目かづき一の松まで出て。

直に「王を藏すや」と歌ひ出だし。「すなはち姿を」と鬘斗目ぬ

ぐもあり。又金春流などにては。「すなはち姿を」の返しの内

橋掛を走り出づるもあり。されど観世清之の梅若六郎なりし頃。

芝の能樂堂にてしたりしも。此春観世鐵之丞の梅若舞臺にてし

たりしも。早笛なりしかば。今は之に従ふのみ。

この早笛にてシテ出で。「すなはち姿を願はし給ひて。天を指す手は」

と舞臺真中の正面先へ出で。扇にて上を指し。「地を又指すは」と

扇逆手に取りて下を指し。「金剛寶石の上に立つて」と拍子ふみ。「一

足を引つ提げ」と扇左に取り横にして前に出し。左の足と共に上げ。

「東西南北十方世界の虚空に飛行して」と。さしわけして廻り一つ

飛んで。「普天の下卒土の内に。王位をいかで輕んぜんと」と。王に向

ひて胸ざし。「大勢力の力を出だし。國土をあらため治まる御代の」

と。兩袖巻き込み仕手柱に來り。「天武の聖代かしとき惠。あらたな

りける例かな」と。小廻して開き。詰足袖返し留拍子いつもの如し。

弱法師

シテ 俊徳丸

面別法師 黒頭 鬘斗目 水衣 腰帶 扇 杖

ワキ 左衛門尉通俊

素袍上下 扇

能のしをり 六の巻

アヒ 従者

狂言上下 扇

河内の國高安の里に左衛門尉通俊といひし人あり。俊徳丸といふ子を持ちたるが。人の讒言を信じて之を放逐せしに。後その冤罪なりしを知りていたく後悔し。その二世安樂を祈るとて。春の彼岸のころ天王寺に就て一七日施行をしたりしに。俊徳丸はあはれにも悲しみのため盲目となりて此場に來あはせ。施行を受けたるより父に知られて。めてたく故郷に伴なはれゆく事を作れり。太鼓なし。季節は二月。地は攝津。

ワキ出て
名のある

ワキ出て、名のり。さる人の讒言によりて我子を追ひ失ひ。あまりに不便なるよしを述べ。今日も施行を引かせばやと思ふよしをいひ。狂言を呼びて觸るべき旨をいひつくと。名乗座にいで。「皆々承り候へ。今日施行の満參にて候間。皆々罷り出て、受け候へ。其分

シテ一繁
にて出づ

心得候へ」と觸れて狂言は入り。ワキは脇座につく。一聲になりてシテ杖つきながら出て來り。三の松に立ち正面むきて。「出て入りの。月を見ざれば明暮の。夜の境を得ぞ知らぬ」と。まづ其身の盲目なる悲しさを歌ひ。「難波の海の底ひなく。深き思を人や知ると。人知れず深き嘆きのある身をかこち。それよりサシの謠いろいゝありて下歌となり上歌となり。不孝の罪に沈みて盲目となり。生をも替へぬ此世より迷ふ暗路は。佛の御光を仰ぐ外なしとの心をいひ來りて。「今も末世といひながら。さすが名に負ふ此寺の。佛法最初の天王寺の」と。歩み出だして静々と舞臺の方に來り。「石の鳥居」と。仕手柱に右の肩かすりて。「こゝなれや」と舞臺に杖つき足とめて心持あり。「立ちよりて拜まん。いざ立ちよりて拜まん」と正面へ二足つめる。こゝは仕手柱を天王寺の鳥居の柱にかたどりてする所作にて。上にいへるは。鳥居の柱が身に觸れたるをもてこゝぞ石の

石の鳥居
の形

舞臺に入

能のしなり 六の巻

鳥居ならんと想像し。いざ之をくぐりぬけて早く御寺に参詣せんと
いふ意味なるが。まだ此所作の外に。この柱に肩のかすりたるをも
て杖にて横に探り。舞臺の方に「立ちよりて」とつめるもあり。又
同じく杖にて探り。左の手にて柱を撫ておろす形をするもあり。あ
るひは歩みながら一の松あたりより斜にゆきかゝり。「石の鳥居」と
杖の先を柱に突き當て、「こゝなれや」と見上げ。舞臺に入るもあ
り。この後者の形は行き當りたるをもて鳥居なりと知りたるなれば。
前のは心持いさゝか異なるべし。かく種々の形もある程にて。太
夫の深く工夫を要する所なりと見え。觀世清孝は天王寺に詣てたる
時。目をつぶり蝙蝠傘の先にて。「こゝなれや」と突き當て探りなど
して見たりし話も傳はり。梅若實は。天王寺見ざりし時は。鳥居に
は大きな臺石などありて。杖にてよしや突き當てゝも。撫ておろ
さるゝやうに柱に手は届くまじと思ひしに。行きて見れば臺石も何

もなく。直に柱にさはらるゝをもて。始めて古人の形を感じたりと。
いつぞやあのれに語れり。

ワキ立ちて扇ひらきて持ち。「頃は如月時正の日。誠に時も長閑なる。
日を得て普き貴賤の庭に。施行をなしてすゝめけり」と歌ひ。シテ
は「げに有難き御利益。法界無偏の御慈悲ぞと。踵を繼いで群集す
る」と歌ふ。施行はじまりてシテも群集の中に交じり出づる心なり。
ワキ之を見て「や」と心づき。「これに出でたる乞巧人は。いかさま
例の弱法師よな」といふと。シテ「又我等に名を付けて。皆弱法師
と仰あるぞや。げにも此身は盲目の。足弱車の片輪ながら。よろめ
きありければ弱法師と。名づけ給ふは理りなり」と。恨むが如く悲し
むが如くワキに答ふるを。ワキ「げに言ひ捨つる言の葉までも。心
ありげに聞ゆるぞや」と譽めて。「まづく施行を受け給へ」といふ。
シテ「あら有難や候」とワキに向きて。「や」と氣を替へ。「花の香の

聞え候」と囁子方の方より梅が香のにほひ來りし心にて打ち見やり。「いかさま此花ちりがたになり候な」といふと。ワキ「あふ是なる靡の梅の花が。弱法師が袖に散りかゝるぞとよ」と教ふるを打ち消し。シテ「うたてやな難波津の春ならば。只この花とこそ仰あるべきに」とワキに向ひて理屈を述べかけしが。又花のにほひに心とられて。「今は春べも半ぞかし。梅花を折つて頭にさしはさまざれども。二月の雪は衣に落つ」と正面直して歌ひ。「あら面白の花のにほひやな」と又前に花の香の聞え來りし方へ向く。けしき見えて興味ある處なり。

ワキ「げに此花を袖に受くれば。花もさながら施行ぞとよ。」シテ「なか／＼の事草木國士。悉皆御法も施行なれば。」ワキ「皆成佛の大慈悲に。」シテ「漏れじと施行に連なりて。」ワキ「手を合はせ。」シテ「袖を廣げエ」と左の水衣の袂を右にて持ち居ると。「花をさへ。」

施行を受

受くる施行のいろ／＼に」とワキ來りて。施行の米鏡を扇より袖に移す形をなし。シテは袖をよく見て袂を左の手にて持ち替へ正面直し「げにや盲龜の我等まで」と面伏せ。「見る心地する梅が枝の」と又花の方に面むけて香をかぐ心持あり。「花の春の長閑けさは。難波の法にも漏れじ。／＼」と。持ち添へたる袂を放し。眞中にゆきて。杖下におきすわる。それよりクリサシクセとなりて。天王寺の縁起を語る文句あり。アゲまでは居グセにて何の所作もなし。梅若實が「金堂の御本尊は」と。合掌の心にて左の手を出だしたりしは珍らしき形にて。他のシテにては見ざる事なりき。

「萬代に。すめる龜井の水までも」とアゲを歌ひ。「濟度の舟をもよするなる」と。右の方に置きたる杖をさぐりて持ち。立ちて右を受け。「難波の寺の鐘の聲」と面伏せて聞き。「異浦々に響き來て。あまねき響満汐の。おしる海山も。皆成佛のすがたなり」とくつろぐ。

ワキは立ちて正面むき。「あら不思議や。是なる者をよく見候へば。某が追ひ失ひし子にて候は如何に。思の餘りに盲目となりて候。あら不便と衰へて候ものかな。人目もさすがに候へば。夜に入りて某と名のり。高安へつれて歸らばやと存じ候」といふ。此間にシテは仕手柱に出づるを見かけ。「やあ如何に日想觀を拜み候へ」といへば。シテは之を聞き。「げに〜日想觀の時節なるべし。盲目なればそなたとばかり。心あてなる日に向ひて」と。橋掛の方を西の空の心にて向き。「東門を拜み南無阿彌陀佛」と下に居て合掌す。ワキ「なに東門とは謂れなや。こゝは西門石の鳥居よ。」シテ「あらおろかや天王寺の。西門を出て極樂の。東門に向ふは僻事か」と立ちてワキへ向ふ。ワキ「げに〜さぞと難波の寺の。西門を出づる石の鳥居。」シテ「阿字門に入つて。」ワキ「阿字門を出づる。」シテ「彌陀の御國も。」ワキ「極樂の。」シテ「東門に。向ふ難波の西の海」と

歌ひ。「入日の影も舞ふとかや」とくつろぎ。杖を左に持ち。扇右に持ちて出で。「あら面白や我盲目とならざりし先は。弱法師が常に見なれし境界なれば。何うたがひも難波江に。江月照らし松風吹き。永夜の清宵何のなすところぞや」と歌ひ。拍子一つ蹈みてカケリとなる。まづ角へゆき。左へ廻り扇ひろげて仕手柱に來り。正面に向き横扇に前にかざしてワカを歌ふのみの形なり。夕日の影の面白げなるに心うかれて。盲目ならざりし時の樂しみを思ひ起す心なるべし。このカケリを舞にかふる事もあり。觀世流にては盲目之舞。寶生流にては雙調之舞。喜多流にては舞入など、稱へて習とするとぞ。

「住吉の。松の隙よりながむれば」と上扇して。地「月おちかゝる淡路島山と。」シテ「ながめしは月影の。」地「ながめしは月影の」と。正面へ出で。「今は入日や落ちかゝるらん」と。橋掛の方に夕日を見



姜文四

やる心にて向き。「日想観なれや曇も波の。淡路給鳥須磨明石。紀の海までも見えたり」と。扇上げ指し廻すやうにして見わたし。「満目青山は心にある」と正面直して扇を胸に當て面伏す。見わたす風景。ことごとく此の胸中に映じ來れるを示し。「あふ見るぞとよ」とイウケン扇して。悟れば悲しみも消え失せたる心をあらはす。

「さて難波の浦の致景のかず」と。くつろぎて扇さし杖又右に持ちて仕手柱先に出で。「南はさこそと夕波の。住吉の松陰」と。正面を角かけて南の心に見なし。杖立て、ながめやり。「東の方は時を得て。春の緑の草香山」と。脇柱の方を向き。「北は何く」「難波なる」と。笛柱の方に向ひ杖一つ突き立て。「長柄の橋のいたづらに」と地の前の方へ廻りゆき。「かなたこなたとありく程に」と右へ左へ杖つき行く心にて出で。「盲目のかなしさは」と跡へ下り。「貴賤の人に

行合の」と。群集の人に突き當るを防ぐ心にて。左の手前へ出だしつゝ目附柱の方へ行き。「まるびたじよひ」と。遂に突き當り跡へ下りて膝つき杖すてゝ安座し。直に杖さぐり持ちて立ち。「げにも誠の弱法師とて」と拍子ふみて。「人は笑ひ給ふぞや」と左の手にて指し。「おもへば耻かしやな」と袖にて顔かくす心にて少し出で。「今はくるひ候はじ」と跡へ下り。「今よりは更に狂はじ」と打合して下に居。杖を下に置く。

「北はいづく」「難波なる」と掛橋にゆきて。「長柄の橋のいたづらに」と欄干に杖を掛けてすりゆく形も度々見たれど。是は本意を失ひたるかと思はる。その故は。長柄の橋は天王寺より北にながめやらるゝ名所を擧げて。その長柄の橋の板といふをいたづらと言ひ掛けたる詞の装にこそあれ。今弱法師がかなたこなたとあるくは天王寺の内にて。橋をわたる心にはあらず。され

ば橋掛の欄干を長柄の橋の欄干に見立てゝする所作は。誤なるを思ふべし。

右の所作を橋掛にてする時は。「貴賤の人に行合の」と脇座の方へゆくもあり。又脇座の方へ行きかけて真ん中にて突き當るもあり。その他狂言を地の上あたりに立たせ置き。それに突き當るやうに出でゝまるびたる形は。觀世清孝の工夫に出でたりと聞き及びし事もあれど。見たる事は一度もあらず。

ロンギになりて。「今は早。夜も更け人も静まりぬ。如何なる人の果やらん其名を名のり給へや」と地より歌ふと。シテ「思ひよらずや誰なれば。わが古を問ひ給ふ。高安の里なりし。俊徳丸が果なり」と答へてワキに向く。地「さては嬉しや我こそは。父高安の通俊よ」とワキも名を告ぐ。シテ「そも通俊は我父の。その御聲と聞くよりも。」地「胸うちさわぎあされつゝ。」シテ「こは夢か」と驚きて膝一

父と子と
入る

つ打ち。地「俊徳は」と杖さぐりて立ち。「親ながら耻かしとて。あ
らぬ方へ逃げゆけば」と。自分の見ぐるしき姿に耻ぢて。目附柱の
方に逃げゆくもあり。又は橋掛にゆくもあり。「父は追いつき手を取
りて」とワキは其側にゆきて手を取る心にて袖を持ちて向け。「何を
か包む難波寺の」と二人向き合ひ對面して。「あけぬ先にといざなひ
て」と杖つきながら静々と幕に入り。「高安の里に歸りけり」とワキ
は喜の心を示してイウケンし留むる。このキリはワキ扇にて指すと。
狂言立ちてシテの跡より送りゆく流儀もあり。

砧

前ジテ 蘆屋何がしの妻
深井 葛 葛帯 袴 唐織 扇

作物

ツレ 夕霧

孫次郎 葛 葛帯 袴 唐織 扇

後ジテ 亡霊

泥眼 葛 葛帯 羽根元結 袴 淺黄大口

白練坪折 扇 杖

ワキ 蘆屋の何がし

段熨斗目 紫袍上下 小サ刀

後は紫袍の上を取りてクアラを掛け小サ刀をも取る

トモ 侍者

熨斗目 紫袍上下 太刀持つ

アヒ 下僕

長上下 扇

九州蘆屋の里に何がしといふ人あり。訴訟の事ありて都に登り
ぬけるが。あまり長逗留になると夕霧といふ侍女を故郷に下
能のしなり 六の巻

し。この年の暮には必ず歸らんといいひおくりしに。折しも砧の音の聞えしかば。わらはも之を打ちて心を慰めたしといひ。やがて夕霧と共に打ち遊びては夫おもふ心を寄せるたりしに。都より又たよりありて此年の暮にも下りがたしと言ひ來りぬ。あまりの事に失望してそれより病の床に打ち伏し。遂に空しくなりたるを。夫歸國していたく悲しみ。みづから佛事回向して吊らひしかば。亡靈いて恨を述べしが。遂に法華讀誦の功にて成佛する事を作れり。太鼓は用ふる事も川ひぬ事もあり。季節は秋。地は筑前。

ワキ出て
い名のある

ワキ出て、舞臺の真中にて名のある。「是は九州芦屋の何がしにて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存じ候へども。當年三年になりて候。あまりに故郷のこと心もとなく候程に。召し使ひ夕霧と申す女を下さばやと思ひ候」といひて。ツレ女に向ひ。

道行

シテ出づ

「いかに夕霧。あまりに故郷心もなく候ほどに。お事を下し候べし。此年の暮には必ず下るべき由心得て申し候へ」といふ。ツレはワキの出づる時跡に附きいて、仕手柱の處に控へたるなり。ツレ答へて。「さらばやがて下り候べし。必ず此年の暮には御下りあらうずるにて候」といふ。此モンダイすみてワキは暮に入り。ツレは立ちて道行うたふ。都より芦屋の里に下る心なり。

着せりすみて。「やがて案内を申さうするにて候」といひ。橋掛にゆき幕に向ひて。「いかに誰か御入り候。都より夕霧が参りたる由御申し候へ」といひ。一まづ後見座にくつろぎて居ると。鼓アシラヒ出しにてシテ出で。三の松に立ち正面むきて。「それ鶯鷺の衾の下には。立ち去る思を悲しみ。比目の枕の上には。波を隔つる憂あり。ましてや深き妹脊の中。同じ世をだに忍草。我は忘れぬ音を泣きて。袖に餘れる涙の雨の。晴間されなる心かな」と歌ひて面曇らす。別

れて久しき夫を戀ふる心の切なるなり。
 この謠の内にツレ立ちて再びシテの方に向ひ。「夕霧が参りたる由そ
 れく御申し候へ」といふを聞き。シテ「何夕霧と申すか。人まで
 もあるまじ此方へ來り候へ」とツレの方へ向き。二人入り替りにな
 りて舞臺に入り。シテは地の前に。ツレは眞ん中に向き合ひてすわ
 り。「いかに夕霧めづらしながら恨めしや。人こそかはり果て給ふと
 も。風のゆくへの便にも。などや音信なかりけるぞ」と云ふを。ツ
 レは「さん候とくにも参りたくは候ひつれども。御宮仕の際もなく
 て。心より外に三年まで。都にこそは候ひしか」と辯解し。シテは
 更に。「なに都住居を心の外とや。思ひやれげには都の花盛。慰み多
 き折々にだに。憂きは心の習ぞかし」と身の上をかこち。「鄙の住居
 に秋の暮れ。人目も草も枯々の。契も絶え果てぬ。何を頼まん身の
 ゆくへ」と初同になり。「げにや偽の。なき世なりせば如何ばかり。

人の言の葉うれしからん。おろかの心やな。おろかなりける頼かな
 と。此謠の内に遠砧の聞え來れる心にて耳を傾け。謠切るゝと。「あ
 ら不思議や」と面を上げ。「何やらんあなたに當つて物音の聞え候。
 あれは何にて候ぞ」とツレに問ふ。「あれは里人の砧打つ音にて候」
 とツレ答ふ。「げにや我身のうきまゝに。古事の思ひ出でられて候ぞ
 や」といひて正面直し。「もろこしに蘇武といひし人。胡國とやらん
 に捨て置かれしに。故郷に留め置きし妻や子。夜寒の寐覺を思ひや
 り。高樓に登つて砧を打つ。志の末とほりけるか。萬里の外なる蘇
 武が旅寐に。故郷の砧きこえしとなり。」これよりツレへ向ひて。
 「わらほも思や慰むと。あまり淋しき呉服。綾の衣を砧に打ちて。
 心を慰まばやと思ひ候」といふを。ツレ「いや砧などは賤しき者の
 わざにてこそ候へ。さりながら御心慰めんために候はゞ。砧をこ
 しらへて參らせ候べし」と答へ。二人立ちて入りかはり。ツレは地

作物出づ

粘の段

の前にゆきて下に居。シテは後見座にくつろぎて右の肩をぬぐ。此間にツレが砧をこしらへたる心にて。後見切戸より作物を持ち出て。脇座の前の處に置く。白水衣を巻きて垂らしたり。シテは仕手柱先に立ちて。「いざ／＼砧打たんとて。馴れて伏す猪の床の上」。ツレ「涙かたしくさむしろに。」シテ「思を述ぶる便ぞ」と作物を見。ツレ「夕霧立ちより諸共に」と立ちて砧のうしろに行き。シテも砧の前にゆき。シテ「恨の砧。」ツレ「打つとかや」と。共にすわりて。「衣に落ちて松の聲」と砧を見。「夜寒を風や知らすらん」とツレを見て。地返しに二人とも立ち本の處にかへる。「音信の。稀なる中の秋風に」とシテ歌ひ。「うきを知らする夕べかな」と開き。それよりイロへになりて。角より舞臺を「まはりし。仕手柱に來りて。「遠里人もながひらん」と右受けて遠く見。「たが世と月は。よも問はじ」と。月をちよと見て右にまはり。左右打込し

て開き。「面白の折柄や。頃しも秋の夕つかた」とシテ歌ひ。「牡鹿の聲も心すごく。見ぬ山風をめぐり來て。梢はいづれ一葉ちる。空すさましき月影の。軒のしのぶにうつろひて」と地歌ふ。此文句の月影を。脇正面の上の方に見るシテもあり。「露の玉簾かゝる身の」とシテ歌ひ。「思ひを述ぶる夜すがらかな」と地の文句にて面疊らし。「宮樓たかく立ちて。風北にめぐり」と面上げ。隣砧ゆるく急にして。月西に流る」と歌ひながら。橋掛の方に月の傾むくを見やり。正面直して。「蘇武が旅寐は北の國。之は東の空なれば。西より來る秋の風の」と。又西の方角を橋掛に見て。「吹きおくれと。間遠の衣打たうよ」と。ツレへ詰足するもあり。又作物を見るもあり。ツレへ詰めるは「打たうよ」の意味。作物を見るは「間遠の衣」の意味にて。いづれをするも優り劣りはあるまじ。「故郷の。軒端の松も心せよ。おのが枝々に。嵐の音を殘すなよ」

松の枝々を見渡す心にて指し廻し。「今の砧の聲をへて」と砧を見。
 「君がそなたに吹けや風」と胸ざしめて。都の夫を思ふ心にて遠く
 見やり拍子一つ踏む。「あまりに吹きて松風よ」と。前に指し廻した
 る枝々の處を見。「我心。通ひて夢に見るならば。其夢を破るな。破
 れて後は此衣」と。左の袖を出だし見て。「誰か来てもとふべき」と
 砧を見。「来てとふならばいつまでも。衣はたちもかへなん。夏衣。
 うすき契は忌まはしや。君が命は長き夜の。月にはとても寐られぬ
 に。いざ／＼衣打たうよ」と。角とり廻り來りて。月を正面の上
 見ながら開き。いざ／＼衣とツレに向ひ。「かの七夕の契には。一夜
 ばかりの假衣。天の川波立ち隔て。逢瀬かひなき浮舟の。梶の葉も
 ろき露涙。二つの袖やしをるらん。水陰草ならば。波うちよせよう
 たかた」と右へ大きく廻り來り。地の前より脇正面の方へ。水陰草
 を見廻しながら面使ふ形などありて上扇となり。「文月七日の曉や」

と歌ひ。「八月九月げにまさな長き夜。千聲萬聲の。憂きを人に知ら
 せばや」と。大左右打込など例の如くありて。「月の色風のけしき。
 影に置く霜までも」と。角へ指してゆき。扇うつむけかざして目附
 柱の下の方に置く霜を見。「心すごき折ふしに」と左へ廻りて脇正面
 に出で。「砧のあと」と面下げ聞く心ありて。「夜あらし」と面上げ。
 「悲しみのこゑ虫の音」としをりながら作物の前にゆき。ツレも其
 うしろにゆき。「まじりて落つる露涙」と共に下に居て砧を見。「ほろ
 くはら／＼／＼」と扇にてシテとツレと相互に打つ形ありて。
 「何れ砧の音やらん」と問ふ心持にてツレを見。槌としたりし扇を
 捨て、正面直す。此ところ一番中に最も趣味ある處なれば最も太夫
 の工夫を要する處ならん。ほろ／＼はら／＼と打てばとて。諸の文
 字一つづゝに當りて。ほろ／＼ばた／＼といふ如くになりてもうる
 さく。さりとてまるではづれても面白からず。附きて附かず離れて

仕舞

離れずといふ呼吸こそ大事なるべけれ。寶生流にては打つ形なくして只作物に向ふのみなるが。是も又工夫なり。されど之を仕舞にする時。觀世流は打つ形なくして聞く心持のみをなし。寶生流は開きたる扇を打合はせて砧打つ心をまねぶ。之を見れば能と仕舞と二流互に正反對なるも奇なり。是も又工夫なるべし。

シテの正面に直す時。ツレは立ちてシテの右の方へ行き。下に居てシテに向ひ。「いかに申し候。都より人の参りて候が。此年の暮にも御下りあるまじきはて候」といふ。都より使の來りしを取り次ぐ心なり。シテ「恨めしやせめては年の暮をこそ。僞ながら待ちつるに。さては早まことにかはり果て給ふぞや」と歌ひてしをり。地になりて。「思はじと思ふ心もよわるかな。聲も枯野の虫の音の。亂るゝ草の花心。風狂じたる心地して。病の床に伏し沈み。遂に空しくなりにけり」と。此文句の内に靜に立ちて面くもらしたるまゝ幕に入る。

中入

病床にて死したる心なれば。謠も形も十分打ち沈みあはれ深きが主意なるべし。ツレも跡につきて入る。

後ワキ出

ありて引くと。後ワキは太刀持を連れて出で。眞中に下に居て。「むざんやな三年過ぎぬる事を恨み。引き別れにしつま琴の。遂の別となりけるぞや」と述べ。「先立たぬ。悔の八千度もよぐさ悔の八千度もよぐさの。蔭よりも。かへりくる道と聞くからに。梓の弓のうらははずに。言葉をかはすあはれさよ。く」と歌ひて合掌す。佛事をなす心なり。

後シテ出

出端（又は一聲）になりて。後シテ杖つきて出で。一の松にて正面むき。「三瀬川沈み果てにしうたかたの。あはれはかなき身のゆくへかな」と靜に歌ひ出だす。「跡のしるべのともし火は」と舞臺に入り。「打てやくと報の砧。恨めしかりける因果の妄執」とワキへ向き。



地になりて「因果の妄執の思ひの涙。砧にかゝれば。涙は却つて火
 焰となつて」と。しをりながら正面へ出て。「胸の煙の燵に咽べば」
 と杖を胸にあて、「叫べど聲が出てばこそ」と面上げて叫ぶ心を示し。
 「砧も音なく」と耳を澄まし聞く心ありて。「松風も聞えず」と橋掛
 の松を見やり。「阿責の聲のみ恐ろしや」と。杖すて跡へ下りて兩手
 を耳にあて下に居る。趣ある處なり。
 扇を抜き持ちて立ち。「羊のあゆみ隙の駒」と拍子一つ踏み。「うつり
 行くなる六つの道。因果の小車の。火宅の門を出てされば。めぐり
 めぐれども」と。真ん中にて廻る形などありて。「あぢきなの浮世や」
 と打合して絶望の心を見せ。「心は葛の葉の」と歌ひ。「歸りかねて執
 心の面影の」と。仕手柱の方へ行きかけたる足を引きてワキの方へ
 ゆき。「耻かしや思夫の」と面伏せて耻かしき心を示し。「末の松山千
 代までと。かけし頼はあだ波の」と。さしまはしなどありて。「あら

よしなや空言や」と跡へ下り。「そもかゝる人の心か」と扇にて膝一
つ打ち。恨を含めてワキを顔ばかりにて見る。

「鳥てふ。大おそ鳥も心して」と歌ひ。「現し人とは誰かいふ」と地
になり。左右打込などありて。「鳥獸も心あるや」と鳥を上。獸を
下に而使ひ見る形をなし。「げに誠たとへつる。蘇武は旅雁に文をつ
け。萬里の南國に至りしも」と。遠く見ながら出で。「契の深き志。
浅からざりしゆゑぞかし」とワキへ胸ざしして出で。下に居て。「君
如何なれば旅枕」とワキを見て。「夜寒の衣うつゝとも。夢ともせめ
てなど」と扇にて下を打ち。「思ひしらずや恨めしや」としつかりと
ワキを見て。恨めし涙にくるゝ心にて。さめくくと打ちしをる。
是より諸の調子かはり。シテの心持もかはりて。「法華讀誦の力にて」
と。恨の一念忽ちに消え失せたる心にて。イウケンしながら立ち。「幽
靈まさに成佛の。道明らかにけり。是も思へばかりそめに。

シテ恨め
し涙にく
るゝ

打ちし碯の聲のうち」と。角より廻り來りて開き。「開くる法の花心」
と右へ扇にて指して廻り。「菩提のたねとなりけり」と仕手柱にて
合掌し。返しにて留拍子ふむもあり。又踏まぬ事もあり。踏むは成
佛して嬉しき心を表せしなるべく。踏まぬはかゝる静なるトメゆゑ
なるべし。總じて此能。戀慕と哀傷との心を旨とし。景物としては
碯あり月あり露あり風あり。遂に佛法の力を以て。戀慕をも哀傷を
も悉く轉じて。成佛の一路に踏せしむるといふ仕細なれば。見るに
あはれに。聞くにやさしく。誰をかは感涙に咽ばしめざるべき。斯
道の秘事として重んずるも故あるかな。

蟬丸

作物葉 屋

シテ 逆髪

龍のしなり 六の巻

ますかみ 黒頭 箱 腰巻 腰帶 扇
帯は白綾 緋大口 籠

ツレ 蟬丸

面蟬丸 鳴食葛 白綾 指貝 水衣 腰帶

上に狩衣 扇 後に角帽子

ワキ 清貫

風折烏帽子 厚板 大口 狩衣 腰帶 小サ刀 扇

輿かき二人

モギドツ

アヒ 博雅三位

風折烏帽子 厚板 大口 長袖 腰帶 扇

蟬丸の宮と申すは。皇子の御身にておはしながら。盲目なるため逢阪山に捨てられ給ひしに。逆髪と申し奉る狂女の姉宮。此處を過ぎさせ給ひし折しも。琵琶の音の聞えたるによりて尋ね

來り。あはれにも御對面ありたる後。やがて互に別れ給ふ事を作れる能なり。狂女物のうちにも。宮の事を作れる能なれば。百萬櫻川の如き物とは。同一にすまじきなるべし。さればツレの蟬丸をも重くして。兩ジテとする事もあり。太鼓なし。季節は秋。地は山城。

始に葦屋の作物を脇座の處に出だし。次第になりて蟬丸ワキ出で。舞臺に入りて。蟬丸正面先に真中に立ち。輿かき左右に輿にかたどりたる作物をさしかけ。ワキは其跡に立ちて。「定めなき世の中々に。うき事や頼みなるらん」と歌ふ。尤も蟬丸は同吟せず。ワキ「是は延喜第四の皇子。蟬丸の宮にておはします。げにや何事も報ありける浮世かな。前世の戒行いみじくて。今皇子とはなり給へども。襦袢の内よりなどやらん。雨眼しひまし〜て。蒼天に月日の光なく。暗夜に燈くらうして。五更の雨も止むる事なし」と歌

逢坂山に
若く

ひ。なほ帝いかなる御慮やらん。逢坂山に捨て置きて。御ぐしを
 ろし申せとの繪言いで、歸らねば。只今御供申すよしをいひ。都を
 出て、逢坂山に着きたる趣の道行ありて。蟬丸は地の前にゆきて下
 に居。輿かきは引き。ワキは蟬丸の前に出づると。蟬丸「いかに清
 貫」と呼ぶ。ワキ「御前に候」と手を突く。蟬丸「さて我をば此山
 に捨て置くべきか。」ワキ「さん候宜旨にて候程に。是までは御供申
 して候へども。何くに捨て置き申すべきやらん。さるにても我君は。
 堯舜よりこのかた。國を治め民をあはれむ御事なるに。かやらの御
 慮は何と申したる御事やらん。かゝる思ひもよらぬ事は候はじ」と
 又手を突きて悲しき心持あり。蟬丸「あらゐろかの清貫が言事やな。
 もとより盲目の身と生るゝ事。前世の飛行つたなき故なり。されば
 父帝も。山野に捨てさせ給ふこと。御情なきには似たれども。此世
 には過去の業障を果し。後の世を助けんとの御はかりこと。是こそ

ナレ制型

賊の親の慈悲よ。あら嘆くまじの勅諭やな」とワキに向く。
 ワキ「宜旨にて候程に。御ぐしをゐろし奉り候」といへば。蟬丸
 「これは何といひたる事ぞ」と問ふ。ワキ「是は御出家とてめてた
 き御事にて渡らせ給ひ候」といひて物着になる。蟬丸こゝにて剃髪
 する心にて。角帽子を着。狩衣脱ぎて水衣となり。「げにや高冠髻を
 切り。なかば壇に枕すと。もろこしの西施が申しけるも。かやらの
 姿にて有りけるぞや」といひ。ワキ「此御有様にては。中々盗人の
 恐もあるべければ。御衣を給はつて簪といふものを参らせ上げ候」
 と謠のみにていへば。蟬丸は簪を受取りたる心にて。「是は雨による
 田簪の鳥とよみおきつる。簪といふものか」と古歌を引きて曉り。
 ワキ「又雨露の御ためなれば。同じく笠を参らす」と笠を渡せば
 受取りて。「是は御侍御笠と申せとよみおきつる。笠といふものよな
 ふ」と又古歌を引きて歌ひ。ワキ「又此杖は御道しるべ。御手に持

新聞

ワキ入る

たせ給ふべし」と杖を又渡せば。「げに〜是も突くからに。千年の坂をも越えなんと。かの遍昭がよみし杖か」と又古歌にて答へ。ワキ「それは千年の坂ゆく杖。」蟬丸「こゝは處も逢坂山の。」ワキ「關の戸ざしの葦屋の竹の。」蟬丸「杖柱とも頼みつる。」ワキ「父帝には。」蟬丸「捨てられて。」初同になりて。「かゝる浮世に逢坂の。知るも知らぬも是見よや。延喜の皇子の。成り行く果を悲しき」とあはれなる文句ありて。「さりとはいつを限に有明の。盡きぬ涙をおさへつゝ。はや歸るさになりぬれば」と。ワキは歸りて樂屋に入ると。「皇子は跡に只ひとり。御身に添ふ物としては。琵琶を抱きて杖を持ち」と。右の手に杖を。左の手に笠を持ちて立ち。心にて見送るさまにて正面先に出て。「臥しまるびてぞ泣き給ふ。〜」と。跡へ下りて笠をも杖をも投げ捨て。安座して兩手にてしをる。堪へかぬるさまなり。名残はおもへど清貫は既になし。只友とするは嵐のみ松の聲のみ。

アヒ

アヒ出てゝ名のる。

「是は此あたりに住む博雅の三位と申す者にて候。さる程に逢坂山に上つ方の御人を捨て申されたる由聞き及びて候間。いかやうなる御方ぞ見て参らばやと存ずる。さればこそ是に御座候。

と蟬丸を見て。

「さても〜痛はしき御方にて候ものかな。誠に只ならぬ御方と見えた。あの如くにして御座あらば。雨露に打たれさせ給ひて。御迷惑なされうずるが餘りに御いたはしく候間。三位が葦屋をしつらひて参らせ候程に。此内に御座なされ候へや」といひて。蟬丸を伴なひゆく心にて。兩手をいだし後より抱ふるやうにすると。蟬丸は杖を持ち立つて作物の中に入る。

アヒ「又やがて御見舞ひ申さうずる間。其内にも御用の事候は能のしなり 六の巻

博雅の三位と御尋ね候へ。随分御宮仕申さうずるにて候。

やがて参らうずるぞや。

といひて引く。尤も作物の扉の開閉はアヒにてするなり。

一聲になりてシテ出づ。通例は唐織の右肩ぬぎ。扇を持つのみなれど。替装束になれば。黒頭に白綾緋の大口にて笹もつ事もあり。

一の松にて歌ひ出だす。「是は延喜第三の皇子。逆髪とは我事なり。

我皇子とは生るれども。いつの因果の故やらん。心よりく狂亂し

て。邊土遠境の狂人となつて。緑の髪は空さまに生ひ上つて。撫づ

れども下らず」と。左の手にて鬢の毛を撫ておろすやうにして見。

右の方受けて道ゆく人を振りかへり見る心にて。「いかにあれなる童

部共は何を笑ふぞ」と問ひ。「何我髪の逆さまなるがをかしいとや」

と自問自答し。「げに逆さまなる事はをかしいよな」といひて正面に

直し。「さては我髪よりも。汝等が身にて我を笑ふこそ逆さまなれ」

と。又道ゆく人の方を向き。又正面直して。「面白し」。是等は皆

人間目前の境界なり。それ花の種は地に埋もつて千林の梢にのぼり。

月の影は天にかゝつて」と上を見て。「萬水の底に沈む」と下を見。

「是等をば何れか順と見逆なりといはん」と歌ひ。「我は皇子なれど

も庶人に下り」と舞臺に入り。「髪は身上より生ひ上つて。星霜を戴

く」と。扇を上げて頭を指し。「是皆順逆の二つなり。おもしろや」

と悟り。乗込拍子ふみてカケリとなり。カケリ例の如くすみて。「柳

の髪をも風は梳るに」と歌ひ。「風にも解かれず」と地受け。「手にも

分けられず」と髪垂れたるを左の手につかみて見。「かなぐり捨つ

る御手の袂」と右の手添へて角へゆき。「抜頭の舞かや淺ましや」と

左へ廻り來りて。正面むき打ちしをる。この處に打切あり。

「花の都を立ち出で」と据拍子ふみて又打切となる。是よりシテ

の都を立ち出で狂ひゆく心にて。道行と名づけたり。「うき音に泣く

か鴨川や。末白河を打ちわたり」と。指し廻して白河をながめ。橋わたる心にて拍子一つ踏み。「粟田口にも着きしかば。今は誰をか松坂や。關のこなたと思ひしに。跡になるや音羽山の。名残惜しの都や」と。仕手柱先より脇座の方へ關を指してゆき。振り返り音羽山を仕手柱の方に見上ぐる心にて出で。「松虫鈴虫さりくずの。鳴くや夕陰の山科の」と。角より虫の音を聞きながら廻りて。「里人もとがむなよ」と指し廻して里人を見まはす心あり。「狂女なれど心は。清瀧川と知るべし」と左右して上扇となり。「逢坂の。關の清水に影見えて」と開き。「今や引くらん望月の。駒の歩みも近づくか。水も走井の影見れば」と。左右して正面へ出で我影の水に移るを見て。「我ながら浅ましや」と驚きたる心にて跡に下り。「髪はどろを戴き」と頭を指し。「黛も亂れ黒みて。げに逆髪の影うつる」と。角にて扇上にかざし下を見て。「水を鏡と夕波の。うつゝなの我姿や」と。

蟬丸程を引く

跡に下りて面伏せうつゝなの姿を耻づる心持あり。是にて逢坂山に着きたる心にて暫く後見座むきくつろぎ居る。

蟬丸は藁屋の中に扇ひらき左に持ち。琵琶引く心にて歌ひ出だす。「第一第二の絃は索々として秋の風。松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は。我蟬丸が調べも四つの。折からなりける村雨かな。あらし心すこの夜すがらやな」と歌ひ。今あらたに心中に浮びたる和歌を吟じ出だせる心にて。「世の中は。とにもかくにも有りぬべし。宮も藁屋も果しなれば」と歌ふと。此間にシテは仕手柱先に出で、吟じ出だせる和歌を耳傾けて聞き。「不思議やな是なる藁屋の内よりも。撥音けたかき琵琶の音きこゆ。そも是程の賤が屋にも。かゝる調べの有りけるよと。思ふにつけてなどやらん。世になつかしき心地し。藁屋の雨の足音もせて。ひそかに立ち寄り聞き居たり」と。少し作物の方に近づきて更に聞き入る心あり。

シテ聞く



ツレ戸
開く

二人相
あ

足音もせてとはいひたれども。盲目の耳の早さは。其物音をや聞きつけいん。「誰そや此藁屋の外面に音するは。此程時々とひらはれつる。博雅の三位にてましますか」と問ふ。シテ「近づき聲をよくよく聞けば。弟の宮の聲なりけり」と獨語し。「なふ逆髪こそ参りたれ。蟬丸は内にましますか」と。作物の中に向ひていふと。蟬丸は「何逆髪とは姉宮かと。驚き藁屋の戸を明くれば」と。杖を持ちて立ち。藁屋の扉を外の方に開けば。シテは見て。「さも淺ましき御有様」と進み近づき。蟬丸も出てい。「互に手に手を取りかはし」とシテの側により。シテ「弟の宮か。」蟬丸「姉宮かと」と。二人互に我左の手を他の肩に掛けて。「共に御名を夕つけの。鳥も音を鳴く逢坂の。せきあへぬ御涙。互に袖やしをるらん」と。下に居て二人手を肩よりはづし。嬉し涙にくるゝ心にて打ちしをる。情こまやかにして感深し。

ロンギ

クセは居グセにて何の形もなく。蟬丸をも兩ジテとなす時には。「時々月は漏りながら」と右の方に見上ぐる形などあるのみなり。クセすみ打切ありてロンギとなり。シテ「是までなりやいつまでも。名残は更に盡すまじ。暇申して蟬丸」と二人とも立ちてシテは別を告げ。蟬丸「一樹の陰の宿りとて。それだにあるにましてげに。姉の宮の御別れ。留まるを思ひやり給へ」と。シテに向ひて歌ふ間にシテは仕手柱までゆき。「げに痛はしや我ながら。行くは慰む方もあり。留まるをさこそと夕雲の。立ち休らひて泣き居たり」と。正面むきて打ちしをる。蟬丸「鳴くや關路の夕鳥。うかれ心はうば玉の。」シテ「我黒髪の飽かて行く。」蟬丸「別路とめよ逢坂の。」シテ「關の杉村すぎゆけば。」この間にシテは靜に一の松あたりまで行き。シテ「葦屋の軒に。」蟬丸「たゝずみて」と。シテは立ち歸る心にて舞臺の方に蟬丸と向き合ひ。「互にさらばよ常には訪はせ給へと」と。別

シテ立つ

シテ入る

を悲しむ心持ありて。「かすかに聲のするほど。聞き送り」と。蟬丸二三足出て、聞き。「かへり見おきて」とシテ少し伸びて見やり。「泣くく別れおはします」とシテしをりながら幕に入る。蟬丸もしをり留むる。あはれなる能なり。

觀世流にては逆髮蟬丸を兩ジテと爲す時は。作物を脇座に出ださず。大小前に正面向け出だすなり。其時は逆髮の形にも蟬丸の形にも多少の替ありて。おのが記憶に残るものをいさゝかいはゞ。逆髮は篋を持ち出て。「粟田口にも」より橋掛へ行き。それより一の松あたりにて常の形をなし。「今や引くらん望月の。駒の歩みも近づくか」と。篋を逆手に持ちて。兩手にて馬の手綱取り左右へ乗り廻す形をなし。「水も走井の」と欄干際へ出て。左の手篋に添へて水を下に見。「まゆずみも亂れ黒みて」と右に廻りて。晝かたげ影のうつるを見込む心にて。ソリガヘリして

下り。例の如くしをりありて。蟬丸の謠の内に舞臺に入りて聞きたり。又蟬丸は前にいへる如く。クセの中の月見る形などありて。キリの逆髪を見送る處は。杖つきながら仕手柱まで出て。「聞きおくり」と面伏せて聞き。「歸り見おきて」と逆髪を見る心にて面上げ。「なくく別れ」と跡へ二三足さがり。しをりながら二足つめたり。

鶴飼

前ヲテ 漁翁

笑財 尉髪 鬘斗日 水衣肩上 腰帶 腰袋

松明 扇うしろにさす

後ジテ 閻魔王

小猿見 赤頭 唐冠 厚板 半切 法鼓 腰帶 扇

ワキ 旅僧

角帽子 鬘斗日 水衣 腰帶 扇さし数珠持つ

ワキヅレ 從僧

ワキに同し

アヒ 處の者

狂言上下 扇

旅僧あり。(實は日蓮上人) 甲斐の石和川のほとりにて一夜の宿を借らんとせしに。禁制のよしいひて誰も貸す者なかりしかば。一の御堂に入りて明かさんとせしに。鶴飼の翁來りて。自らは殺生禁斷の處にて鶴を遣ひ。其事露顯して殺されたる者の亡者なるよしを述べ。罪障懺悔のためにとて。鶴を遣ふ體をして見せ。消え失せたり。よりにて僧は。川瀬の石に法華經の文字をし

るし。波間に沈めて吊らひしに。其功德により。閻魔王出て、地獄に沈みたりし鶺鴒の翁を。佛所に送るといふ事を作れる能なり。法華經の功德を十分述べたる能なれば。法華宗佛事の法樂などには最も適當すべし。太鼓あり。季節は夏。地は甲斐。

ワキ名乗

ワキ出て、名をのる。「是は安房の清澄より出てたる僧にて候。我いまだ甲斐の國を見ず候程に。此度甲斐の國行脚と志して候」と。それよりサシにて。「行末いつと白波の。安房の清澄立ち出て。六浦のわたり鎌倉山」と歌ひ。上歌になりて。「やつれ果てぬる旅姿。く。捨つる身なれば耻ぢられず。一夜假寐の草薙。鐘の枕の上に聞く。都留の郡の朝立つも。日たけて越ゆる山道を。過ぎて石和に着きにけり。く」と。例の如く道行のトメの着足ありて。狂言を呼び出だし問答す。

狂言と問答

ワキ「いかに此石和川の在所の人の渡り候か。」狂言「在所の者の御

一聲にてシテ出づ

尋ねは何の御用にて候ぞ。」ワキ「是は往來の僧にて候。日の暮れ候へば一夜の宿を御借し候へ。」狂言「參らせたうは候へども。此所の大法にて御身のやうなる修行者には宿を參らせず候間。御いたはしながら叶ひ申すまじく候。」ワキ「さてはしかと御貸あるまじく候か。」狂言「中々の事。」ワキ「あら曲もなや候。」狂言「なふく御宿參らせう。」ワキ「それは祝着申して候。」狂言「いや是より少し御出て候へば。人やどりの候それへ御越候て。一夜あらうずるにて候。」ワキ「それは其方にて候か。」狂言「いや總堂にて候よ。」ワキ「それは御身に借るまでもなく候。」狂言「お僧はすね事を仰せらるゝよ。其堂にはばけ物が候ぞ。」ワキ「法力にてとまり候間苦しからず候。」と。終りて狂言引くと一聲になりてシテ出づ。鶺鴒の翁の姿にて腰篋し。松明を右の手に持ちて振りながら舞臺に入り。仕手柱に立ちて。「鶺鴒舟に燈す篝火の。後の暗路を如何にせん」と歌ひ。それより語なが



ワキとの
問答

き文句ありて。殺生のわざに一生を送りし先非を悔ゆる心など述べ
て後。「いつもの如く御堂に上り靴を休めうずるにて候」と。川より
上り御堂へゆく心にて。脇正面の方より廻り。松明振り照らしてワ
キの前へ行かんとする處にてワキの居るを見つけ。「や」と驚きて。
「是は往來の人の御入り候よ」といふと。ワキ答へて。「さん候往來
の僧にて候が。里にて宿を借り候へば。禁制の由申し候程に。さて
此御堂に泊りて候」といふ。シテ「げに〜里にて御宿參らせうず
る者は覺えず候」といへば。ワキ「さて御身は如何なる人にて渡り
候ぞ」と問ふ。シテ「さん候これは靴遣にて候が。いつも月の程は
此御堂に休らひ。月入りて靴を遣ひ候」と答ふ。
それよりワキは殺生を止めよと勧め。シテは若年より是にて命を助
かりたれば止められずと答ふるを見て。ツレ僧は「如何に申し候」
とワキに向ひ。「此人を見て思ひ出だしたる事の候。此二三箇年先に。

カタリ

此河下岩落と申す處を通り候ひしに。かやうの鶴遣に行きあひ候程に。科の中の殺生の由を申して候へば。げにもとや思ひけん。我屋に連れて歸り。一夜けしからず搦して候ひしよ」と語れば。シテ「さては其時の御僧にて候か」と驚きたる如くに問ふ。ツレ「さん候其時の僧にて候」といへば。シテ「なふ其鶴遣こそ空しくなりて候へ」と告ぐ。ツキ「それは何故空しくなりて候ぞ」。シテ「耻かしながら此わざにて空しく成りて候。其時の有様語つて聞かせ申し候べし。跡を吊うて御やり候へ」といひて真ん中に行き。下に居て松明を下に置き。正面むきてカタリとなる。

「そもく此石和川と申すは。上下三里が間は堅く殺生禁断の處なり。今仰せ候岩落邊に鶴遣は多し。夜なく此所に忍び上つて鶴を使ふ。憎き者のしわざかな。彼を見顯はさんとたくみしに。それをば夢にも知らずして。又ある夜忍び上つて鶴を使ふ。ねらふ人々ば

鶴の段

つとより。一殺多生の理に任せ。彼を殺せといひあへり」とツキへ向き。「その時左右の手を合はせ」と正面に合掌し。「かゝる殺生禁断の處とも知らず候。向後の事をこそ心得候べけれど。手を合はせ嘆き悲しめども。助くる人も波の底に。柴漬にし給へば。叫べど聲が出てばこそ」と語り終りて。「その鶴遣の亡者にて候」とツキへ向く。ツキは「言語道断の事にて候」と驚き。さらば罪障懺悔のため、に鶴を遣うて見せよといひ。シテは松明を持ちて立つ。是より鶴の段として仕舞などにてする面白き處あり。

シテ「しめる松明振り立て」と歌ひながら松明を振り。ツキの「藤の衣の玉だすき」を歌ふ間に笛座の方へ行き。シテ「鶴籠を開き取り出だし」と扇を籠の意味にて左の手に抜き持ち。ツキ「鳥つ洲ちろし荒鶴ども」シテ「此河波にばつと放せば」と。鶴を放す心にて扇投げ出すやうに開き。「ちもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。

驚く魚を追ひ廻し」と。松明ふりながら下を見ながら脇の前まで行き。又仕手柱まで行き、両手にて追ひ廻す形をなし。「かづき上げすくひ上げ」と正面へ出て、扇にて魚をすくふ形をなし。「隙なく魚を食ふ時は」と。扇を上げ魚すくひたる心にて見。「罪も報も後の世も。忘れ果て、面白や」と。跡へ下りて膝一つ打ちワキを向く。「漲る水の淀ならば。生の鯉や上らん」と。正面先の下の方を水の心にて見。「玉島川にあらねども。小鮎さばしるせゝらぎに。かだみて魚はよもためじ」と。出て、松明にて指し廻し下を見渡し。「ふしぎやな篝火の。燃えても影の暗くなるは」と。松明上げて見て。「おもひ出たり。月になりぬる悲しさよ」と。脇柱の上の方を月の出でたる心にて見やり。松明も扇も投げ捨て、跡に下り打ちしをる。「鶉船の篝火消えて。暗路に歸る此身の。名残惜しさを如何にせん」と。静に右へ廻り立ち歸りてワキを見。顔を殘して中入す。

中入

アヒ

前の狂言又出て、名乗座に立ち。

「是は石和川の在所の者にて候。ゆふべ修行者の宿を御借り候へ共。此所の大法ゆゑつれなう貸し申さず候が。あれなる人やどりを教へ申して候が。未だあれに御入り候か。立越見申さばやと存じ候。

とワキを見て。

「や。昨日のお僧達はいまだ是に御座候よ。

といふ。ワキも之を見て。

ワキ「最前宿を貸さる人にて候か。近う渡り候へ思ひ合はする事の候間。古へ此所にて勅遣の果てたる子細。語つて聞され候へ。

是より狂言真中にゆきて語る。

總じて此石和川と申すは。在所知行の間。此川にては堅く殺鹿のしなり六の巻

生禁断にて候を。此川上に岩落と申す在所の鶴道にて候が。片時も獵を仕らず候へば。生路叶はず候によつて。禁断の所へ夜な〜忍び入り鶴を遣ひ候。或人は是を見付けて申すは。此川へは夜々光物が来るなど申し候を。若き者いざやねらうて賊の姿を見んと申して。夜々之を相待つ處に。彼者は夢にも知らず篝火ほの〜焼き。川の上下鶴を遣ひ候を。すは光物こそ来りたれと。我人ねらひ寄り候へども。彼者魚は多し鶴は隙なく候へば。人音をも聞かず魚を取り候處を。ひんづと手ごめからめ候へば。老人の鶴つかひにて候。何くの者ぞと尋ね候へば。岩落の里の者にて候と申すを。何にてもあれ大法にまかせふしづけにせよとて。大きな竹を割りて簀巻にして。此川の底につぶと沈め候。あはれさ申すばかりなく候。御經にもじゆしやいぶつだうと説き給へば。逆縁ながら

此川邊に御出であつて。御經をあそばし。彼亡魂をとふらひて御通りあれかしと存じ候。とワキへ向く。

ワキ「懇に御物語り候物かな。今夜此所へ御身の物語に少しもかはらず老人の鶴つかひ来り候程に。不審を申して候へば。古の鶴道の亡者なるよし申し。其まゝ姿を見失ひて候が。さては疑ふ處もなく。其時の鶴つかひの亡心と思ひ候程に。おことの仰にまかせ逆縁ながら吊ひ候べし。

といひ。尙少しのモンダイありて狂言は引きワキは正面に直す。狂言引くとワキの待詔となり。それより早笛にて後ヲテ出づ。殺生の罪を呵責する閻魔法王の姿なり。一の松にて留め。「それ地獄遠きにあらす。眼前の境界。悪鬼外になし」と先づ地獄悪鬼の説明をなし。鶴飼の翁の事に及びて。「そも〜彼者。若年の昔より。江河に

早笛にて
後ヲテ出

漁つて其罪をびたし。されば鐵札數を盡し。金紙をよごす事もなく。無間の底に。墮罪すべかつしを」と。乗込拍子ありて。「一僧一宿の功力に引かれ」と左の袖かへしワキを見。「急ぎ佛所に送らんと。悪鬼心を和らげて。鶉船を弘誓の舟になし」と歌ひ。「法華の御法の助舟。篝火も浮むけしきかな」と舞臺に入る。それより角取り廻り。「千里が外も雲晴れて」と見上ぐる形などありて。ロンギとなり。シテ「法華は利益深きゆる。魔道に沈む群類を。救はん爲めに來りたり」と。ワキへ乗り込みて開き。地「げに有難き誓かな妙の一字はさて如何に」角取りて廻り。シテ「それは褒美の詞にて。妙なる法と説かれたり。」地「經とはなどや名づくらん」と小廻して開き。シテ「それ聖教の都名にて。」地「二つもなく。」シテ「三つもなし」と長拍子ふみ。「只一乗の徳によりて」と正面へ出で。「那落に沈み果て」と平座して面伏せ。「浮み難き惡人の。佛果を得ん事は。此經

ロンギ

キ

の力ならずや」とワキを見。「これを見かれを聞く時は」とイウケンしながら立ち。「慈悲の心を先として。僧會を供養するならば。その結縁に引かれつゝ。佛果菩提に至るべし」と。角取り廻り來りてワキに向き開き。「げに往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。く」と。指して右へ廻り。小廻して開き。袖返して拍子陥み留むる。

鐵輪

作物幣 棚

前シテ 女

泥眼 葛 葛帯 箱 腰巻 唐織坪折
扇 笠

後シテ 女の生靈

橋姫 葛 葛帯 鐵輪いたゞく 箱 腰巻
能のしなり 六の巻

打杖 扇

ワキ 安倍晴明

風折烏帽子 厚板

大口

腰帶

扇

幣

ワキツレ 男

素袍上下 扇

アヒ 社人

洞烏帽子 鬘斗目

狂言袴

脚半

水衣

扇

もとの妻を去りて後妻を迎へたる男あり。去られたる妻夜な夜な貴船の明神に参詣して。恨を報いんと祈りゐたりしが。その功あらはれて男の身に危害の近づかんとするにや。夢見あしき事あるを憂へ。當時陰陽道もて其名聞えたる安倍晴明の許に至り。その事を語りしに是は女の恨を受けたるならんとて。祈禱をなしるたる處に。女の生靈きたりて命をも取り殺さんとした

口あげ

シテ次第
にて出づ

りしを。遂に祈り伏せて遂ひ遣り。男の命を救ふ事を作れり。能に嫉妬の事を種とせしは此鐵輪と葵上と二番なるが。葵上は貴族的にて位高く。鐵輪は平民的にて位卑しさと共に。その心持も違はざるべからず。太鼓あり。季節なし。地は京都。

狂言出て、先づ名のる。「かやうに候者は。貴船の宮に仕へ申す者に候。さても今夜不思議なる靈夢を蒙りて候。そのいはれは都より丑の時参りをせられ候に。申せと仰せらるゝ子細。あらたに御靈夢を蒙りて候程に。今夜まゐられ候はゞ。御夢想の様を申さばやと存じ候」といひて。くつろぎ居る。

次第になりてシテ出で。例の如く仕手柱先より大小の方をひきて歌ふ。遠路をゆく心にて笠を着たり。「日も數そひて戀衣。く。貴船の宮に参らん。」是より都の我屋を出立せんとする心なり。地取の間に正面むき。「げにや蜘蛛の家に荒れたる駒は繋ぐとも。二道かくる

能のしなり 六の巻

あだ人を。頼まじとこそ思ひしに。人の偽り未知らて。契り初めにし悔しさも。只我からの心なり。餘り思ふも苦しさに。貴船の宮に詣てつゝ。住むかひもなき同じ世の。内に報いを見せ給へと。頼みを掛けて貴船川。早く歩みを運ばん」と。その心中を述べて道行となり。「通ひなれたる道の末。く。夜も糺のかはらぬは」と。鴨の河原より始めて。「思に沈む御菩薩池。生けるかひなき浮身の。消えん程とや草深き。市原野邊の露わけて。月遅き夜の鞍馬川」と。出て來ぬ月を待つ心にて遠く東の空をながめやり。「橋を渡れば程もな。貴船の宮につきにけり。く」と。右受けて少し出で。立ち歸りて大小前の方に着く。既に貴船の宮の心なり。

笠ぬぎ正面に向きて。「急ぎ候程に。貴船の宮に着きて候。心静に參詣申さうするにて候」といひて。大小前へゆき床几にかゝると。以前の狂言いで。「いかに申すべき事の候。御身は都よりの丑の時參

床几にかゝる

道行

り召さるゝ御方にて渡り候か。今夜御身の上を御夢想に縋りて候。

御申しある事は早叶ひて候。鬼になりたきとの御願にて候程に。我屋へ御歸りあつて。身には赤き衣を着。顔には丹を塗り。頭には鐵輪を戴き。三つの足に火を燈し。怒る心を持つならば。忽ち鬼神と御成り有らうするとの御告にて候。急ぎ御歸り有つて。告の如く召され候へ。なんぼふ奇特なる御告にて御座候ぞ」といひ。シテ「是は思もよらぬ仰にて候。童が事にては有るまじく候。定めて人たがひにて候べし」と答へ。狂言また「いやくしかと新なる御夢想にて候程に。御身の上にて候ぞ。かやうに申す内に何とやらん恐ろしく見え給ひて候。いそぎ御かへり候へ」といひて。「なふ恐ろしや恐ろしや」と獨言いひながら樂屋に入る。

シテ「これは不思議の御告かな。まづく我屋に歸りつゝ。夢想の如くなるべし」と強く歌ひ。地になりて。「いふより早く色かはり

走込にて
中入す

けしき變じて今までは。美女の形と見えつる。緑の髪は空様に」と笠にて頭を指し。「立つや黒雲の」と床凡を立ち。「雨ふり風と鳴神も」と角へゆき笠かざして上を見。「思ふ中をば避けられし。うらみの鬼となつて。人に思ひ知らせん」と。正面むき笠投げ捨て。きつと向を男の居る方の心にて見やり。「うさ人におもひ知らせん」と。橋掛へ向ひ走込にて中入となる。

此處は大事なる見どころ仕どころなれば。太夫により色々の工夫あるべし。投げ捨てたる笠を「おもひ知らせん」と恨めしげに見るもあり。また「おもひ知らせん」と一の松まで走りゆき。返しに少し静めて入りたるをも見たり。

男出す

男いで、名のる。「かやうに候者は。下京邊に住む者にて候。我此間うちつゞき夢見あしく候程に。晴明のもとへ立ち越え。夢の様をも占なはせばやと存じ候」といひて橋がゝりに行き。幕に向ひ。「いか

に案内申し候といふと。ワキ出て。「誰にて渡り候ぞ」といふ。男「さん候下京邊の者にて候が。此程うちつゞき夢見あしく候程に。尋ね申さんために参りて候。」ワキ「あら不思議や。考へ申すに及ばず。是は女の恨を深く蒙りたる人にて候。殊に今夜の内に御命も危く見えて候。もし左様の事にて候か。」男「さん候何をか隠し申すべき。我本妻を離別し。あたらしき妻を語らひて候が。もし左様の事にててもや候らん。」ワキ「げに左様に見えて候。かの者佛神に祈る數つもつて。御命も今夜に究まつて候程に。某が調法には叶ひ難く候。」男「是まで参り御目にかゝり候事こそ幸にて候へ。ひらに然るべき様に御祈念あつて給はり候へ。」ワキ「此上は何ともして御命を轉じかへて参らせうするにて候。急いで供物を御とのへ候へ。」畏まつて候。」

このモンダイ濟みて。ワキと男と入り替り。男は祈禱の供物など準

作物を出

備する心にて樂屋に入り。ワキは舞臺に入りて大小前に笛柱の方むきてくつろぎ居ると。後見作物を持ち出て、正面先に据ゑ。その前に一盞臺を置く。作物は二段に棚を作り。上段には侍烏帽子と髪毛とを置きて。夫婦の人形となし。下段にはワキの持つべき幣を載せ。又四方の柱には赤黄青緑などの幣を立て。めぐりには幣附けたる注連を張れり。

ワキ斬る

ノットになりてワキ臺に上り。「いで〜轉じかへんとて。茅の人形を人尺に作り。夫婦の名字を内に込め。三重の高棚五色の幣。あの〜供物を調べて。肝膽を碎き祈りけり」と歌ひ。「謹上再拜」と幣を振りて戴き。それより祈禱調伏の文句ありて「祈れば不思議や雨ふり風ふち。神なり稻妻しきりに満ち〜」と空を見上げて。「御幣もよ〜めき鳴動して。身の毛もよだちて恐ろしや」と。幣を置きてワキは地の前にゆき下に居る。

出端にて
ツテ出

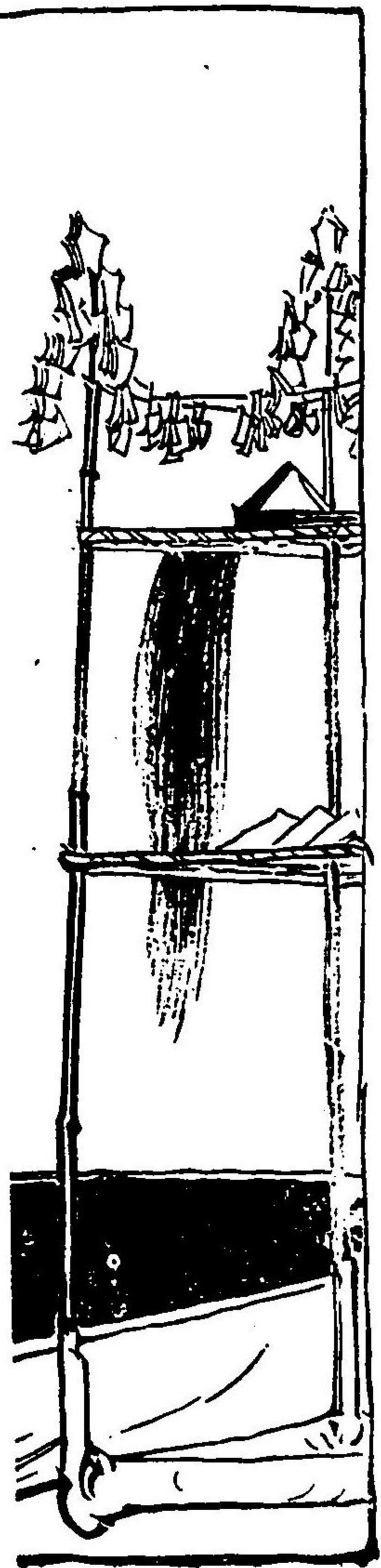
出端になりて後ジテ出づ。鐵輪を載きて其三つ足に火をともしたるは。丑の時參にしたる古の風俗なるべく。晝などにて見ても知られ。打杖もちたるは鬼になりたるを見せたるにて。面の橋姫といへるは嫉妬の容貌を寫したるものなれば凄き事いはんかたなし。太夫によりては生成といふ面をも着る。是は人の顔の半ば鬼になりかけたる形に作れるなり。

一の松にて正而むき。「それ花は斜脚の暖風に開けて。同じく森春の風に散り。月は東山より出て、早く西嶺に隠れぬ。世上の無常かくの如し。因果は車輪の廻るが如く。我に憂かりし人々に。忽ち報いを見すべきなり」と。詰足して思の迫れる心を示し。「戀の身の。浮む事なき鴨川に」と歌ひ。「沈みしは水の青き鬼」と地にて附け。「我は貴船の河瀬の釜火」と開きて自らの身なる心を見せ。「頭に戴く鐵輪の足の」と打杖にて頭を指し。「ほのほの赤き鬼となりて」と歌ひ

舞臺に入

ながら舞臺に入り。「伏したる男の枕に寄り添ひ」と作物を見て臺に上り。如何に殿御よ。めづらしや」と。男の心にて幣棚の烏帽子を見。左の手にてさめくと泣く。

それより恨を述ぶる心にて。「うらめしや御身と契りし其時は。玉椿の八千代二葉の松の末かけて。かはらじとこそ思ひしに。などしも捨ては果て給ふらん」と。きつと見て打杖を胸に當て。「あら恨めしや」と居立ちたるが。「捨てられて」と又泣き。「思ふ思の涙に沈み」



と立ちて臺を下り。仕手柱までゆきて正面むき。「ある時は戀しく」と面伏せ。「又は恨めしく」と面上げて向を見。「起きても居ても忘れぬ思の」と。臥膝して廻り。

「消えなん命は今宵ぞ」と作物へ胸ざしして。咒ひ殺さんとするよしをいひ。さすがに氣の毒なりとの心を示す。

「あしかれと。思はぬ山の峰にだに」と打切あり。是より少し心持かはりて。「人の嘆きは生ふなるに」と出で。「況んや年月。思に沈む恨の數つもつて。熱心の鬼となるも理りや」と。拍子ふみて自分の鬼となりたる心を見せ。「いでく命を取らん」と。作物を打杖にて指して猶も恨を男に寄せ。臺に上りて「しもとを振り上げうはなり」と。打杖ふりあげて後妻に擬したる棚の髪毛を見。「髪を手にからまいて」と左の手に巻き附け持ちて。「打つや宇津の山の」と後妻を打擲する心にて髪を打ち。「今さらさこそ悔しかるらめ」と恨めしげに見て。「さて懲りや思ひ知れ」と又打ちて持ちたる髪毛を放し。「殊更うらめしき」と。又男の恨を思ひ出で。泣きながら臺を下りて仕手柱の方へ行き。「あだし男を取つて行かんと。伏したる枕に

立ちより見れば」と。又立ち歸り作物の側へゆきて。打杖振り上げ男をも打擲せんとする心にてきつと見たるに。「恐ろしや幣帛に。三十番神ましくと」と。神々あらはれて夫婦を守り居給へば。氣をかへて其方に面を向け跡に下り。「いでよくと責め給ふぞや」と。打杖にて二つ打ちながら出で。却りて我身の神々に打ち拂はるゝ形を學び。「腹立や思ふ夫をば取らて剩へ神々の。責を蒙る悪鬼の神通」と。長拍子ふみて又我身の怒ふかきを示し。「通力自在の勢たえて。力もたよく」と。足弱車の廻りあふべき。時節を待つべしや」と。角に陥み込みて打杖襟に掛け。ソリガヘリしてたじくと仕手柱の方へ下り臥膝して。神々に懲らされ力よわり足よろめく心を見せ。こゝにて打杖を捨て。「まづ此度は歸るべしと。いふ聲ばかりはさだかに聞えて。いふ聲ばかり聞えて」と。扇ひらき持ちて角の方より脇座の方へゆき。仕手柱へ乗り込みて。「姿は目に見えぬ鬼とぞなり

にける。目に見えぬ鬼となりけり」と。扇左に持ち顔に當てし下に居る。目に見えぬ鬼といふ心なり。

大佛供養

前ジテ 悪七兵衛景清

直面 段裝斗目 大口 掛素袍 腰帶

小サ刀 扇 笠

母(ツレ)

深井 葛 葛帶 箱 唐織

後ツテ 前に同じ

直面 露烏帽子 厚板 大口 側次 單付衣層と 腰帶

太刀 袴

頼朝(子方)

風折烏帽子 箱 大口 長組 腰帶

小サ刀 扇

立衆(數人) 警固の武士

梨子打烏帽子 白鉢巻 厚板 大口 側次 腰帶

小サ刀 扇 後に太刀

ワキ 從臣

折烏帽子 厚板 大口 掛直垂 腰帶

小サ刀 扇

悪七兵衛景清は母の宿所を訪ひ行きて對面し。一夜を明かして涙ながらに立ち別れ。東大寺の大佛供養に頼朝の詣づるを聞きて。群衆に紛れねらひ討たんとしたりしが。事あらはれて成らざりしかば。茂みに飛び入り身を隠したる事を作れる能なり。

能のしなり 六の巻

太鼓なし。季節は秋。地は大和。

唯子方座に着くと。母いて、脇座に下に居る。

次第にて
シテ出づ

次第にてシテ笠を被りて出で。舞臺に入り大小の方に向きて。「忘は草の名に負ひて。く。忍ぶや我身なるらん」と歌ひ。地取の間に笠ぬき手に持ちて正面むき名のる。「是は平家の侍悪七兵衛景清にて候。我此間は西國の方に候ひしが。宿願の子細あるにより。此程罷り上り。清水に一七日参籠申して候。又承り候へば。南都大佛供養の由申し候。某も若草邊に母を一人持ちて候程に。かやらの折節貴賤に紛れ。向顔のため只今南都へと急ぎ候」と。それより又笠を着て。平家の亡びたるが爲め。馴れし都を出て、憂き住居をなすよしの述懐をなし。母を尋ねて春日の里に着きし事を歌ひ。笠をぬぎ着せりフありてくつろぎ居ると。母「さても我子の景清は。此程何くに有るやらん」と思ひ出で。合掌して「南無や三世の諸佛。我子の

母祈る

母子對面

景清に。二度逢はせてたび給へ」と祈念し居ると。シテ案内を乞ふ。母「我子の聲と聞くよりも。覺えず扇に立ち出で。景清なるかと喜べば」と立つて少し出づるを。シテは「暫く」と押し止め。「あなたに人もや候らん。某が名をば仰せらるまじいにて候」といひ。母「まづこなたへ渡り候へ」といひて下に居。シテも家の内に入る心にて真ん中に行き下に居る。シテは大佛供養のあるよしを聞きて。貴賤にまぎれて御音づれに来れるを述べ。母は汝が頼朝をねらふと人のいふは誠なるかと問ひ。物語こまやかにて語りくありたる後。「はや夜の明けて候程に御暇申し候」とシテ母に向ひ。「かまへて御身をよくく謹みて。重ねて來り給ふべし」と母シテに向ひ。「げに有難き母の慈悲。御言葉の末も頼もしき」と。シテ歌ひて地になり。「は、その森の雨露の、梢もぬらす我袖を。しをりかねたる涙かな」と。この打切にて笠を着

頼朝ヲキ
出づ

一聲にて
後シテ出

て立ち。「いつしか親心。悲しむ母の門送り。景清も跡を見かへりて。涙と共に別れけり」と。シテは一の松にて見かへり。母は立ちて遠く見送り。互に打ちしをりてシテ先づ入り。母も跡より入る。

一聲にて頼朝ヲキ立衆と出て、舞臺に立ち並び。頼朝の名乗。大佛殿の謂などいひ。上歌にて「大伽藍の御供養。光かやく春の日の。三笠の山に陰高き。法の御聲のさま〜に。供養をなすぞ有難き」と歌ひ。大佛供養のよしを知らせて。一同に脇座より順次に下に居る。頼朝は床几なり。

一聲にて後シテ出づ。烏帽子狩衣を着たるは春日の宮人に装ひたるなり。下に側次を着たるは鎧を着込みたる心なり。箒持ちたるは庭を清めの役人に擬したるなり。

一の松にて。「面白や奈良の都の時めきて。色々飾る物詣。我はそれには引きかへて。敵を討たん謀を。思ふ心は己が名の。思七兵衛景



清と。よそにてそれと人やもし。白張淨衣に立烏帽子。げに我ながら思はざる。姿に今は櫛の葉の。時雨降り置く天が下に。身を隠すべき便なき。うき身の果ぞあはれなる」と述懐し。「宮人の姿を暫し狩衣」と舞臺に入り。「塵にまじはる宮守の。供養の庭に立ち出づる」と。箒にて左より右より下を掃きながら出て、頼朝をきつと見。箒捨て、走りかゝるを。ワキ扇にて支へ止むると跡に下る。

ワキ「こは何者なれば御前近く参るぞそのき候へ」と咎め。シテ「是は春日の宮仕なるが。今日の佛の御供養。庭を清めの役人なるを。何しに咎め給ふらん」と辨ず。尙モンダイ二つ三つありて地になり。「稍つまり言葉の末」とワキは刀の柄に手を掛け。「名のれくと責めければ」と。シテの前まで詰め寄ると。「あらはれたりと思ひつゝ。さらぬやうにて立ち歸り。又人陰に隠れけり」とシテは早足に右へ廻りてくつろぐ。ワキは仕手柱先まで追ひ行く心にて橋掛

ワキに咎めらる

シテ隠るふワキ道

の方を見る。此時シテはくつろぎたる間に。烏帽子狩衣を取りて白鉢巻となし太刀を持ち居る。

ワキは仕手柱先に歸りて。「言語道断の事、只今の者を如何なる者ぞと存じて候へば。平家の侍悪七兵衛景清にて候。正しく我君をねらひ申すと存じ候程に。警固の者に申し付け討ち取らせばやと存じ候」といひて立衆へ向き。「いかにや如何に警固の兵たしかに聞け。只今見えし痴者を。早討つ取つて参らせよと。さも高聲に下知すれば」と歌ふと。「畏まつて候とて。かねて用意の警固のつはもの。皆一同に立ち騒ぐ」と。立衆はワキに辭儀して地の方に向き。梨子打小サ刀を取りて太刀を持ち。頼朝は座を立ちて切戸より入り。ワキも其跡より入る。立衆は本の座に立ち居ると。シテ一の松に出で、「其時景清また立ち出で、思ふやう。こゝ立ちのきては弓矢の耻辱となるべきなれば。

切り合ふ

今一太刀は打ち合ひて。重ねて時節を待つべしと。大音上げて呼ば
 いりけり」と詞にていひ。節になりて。「そもく是は平家の侍。惡
 七兵衛景清と」と立衆に向ひ。「名のりもあへず痣丸を。するりと抜
 き持ち立ち向ひ。大勢に割つて入れば」と。太刀を抜いて舞臺に入
 り。立衆の中に切つて入ると。「さしもかためし警固なれども。四方
 へばつとぞ逃げにける」と。他の立衆は皆切戸より入る。
 「中に若武者進み出て。走りかゝつてちやうと切れば。ひらりと
 飛んで手元により。忽ち勝負を見せにけり」と。残りたる一人の立
 衆と切組あり。立衆切られて入ると。「今は景清これまでなりと。少
 し祈念を致しつゝ」と心持ありて。「かの痣丸をさしかざせば。霧立
 ち隠すや春日山」と。太刀にてさして一つ廻り。「茂みに飛び入り落
 ちけるが」と。橋掛に行きながら一つ飛び上りて膝つき。「又こそ時
 節を待つべけれど。虚空に聲して失せにけり」と。三の松にて正面

へ開き太刀かたがけて留むる。

班女

シテ女 花子

若女 葛 葛帯 箔 唐織袴 扇

ワキ 吉田少將

風折烏帽子 厚板 大口 長組 扇

トモ 従者

紫袍上下 扇

アヒ 宿の長

びなん帽子 箔

美濃の國野上の宿に花子といへる遊女ありしが。吉田の少將の

能のしなり 六の巻

東國へ下るとして宿りたる時に深き籠を受け。形見の扇を取りかはして別れし後。花子は其扇にのみながめ入りて他の客にまみえざるより。遂に此宿を追ひ出だされぬ。少將は歸る道にも立ちよりて逢はんとせしに。今は此地に居らざるよしなれば。せん方なく都に歸り。その再會を祈らんとて。加茂の社に詣てたるに。花子も戀慕の心しづめがたくて狂ひ出でたる處にめでたく行き逢ふ事を作れり。太鼓なし。季節は秋。地は京都。

狂言女

狂言女いで、名乗座に立ち。「かやうに候ものは。美濃の國野上の宿の長にて候。わらはあまたの上臈を持ちて候。中にも花子と申す上臈は。幼き時より是に持ちて候が。此人は扇子にすぎて。明暮扇さばくりをのみ致すによつて。扇子について子細ありとて。花子班女と皆々仰せられ候。それにつき。此春都より。吉田の何がしと申す御方東へ御下り候が。わらはが處に御泊りあつて。かの花子に御酌

シテ出づ

を取らせられ。何がし殿の扇子に取りかへさせられて御下り候ひしに。班女その扇子にながめ入り。今は人の御酌とて召さるれども。遂に参らず候間。長がわざにてありとて。皆々わらはを御叱りなされ候て迷惑致す。色々異見を申せども。今は早わらはが申す事をも聞き申さず候程に。花子を置きても詮なく候間。追ひ出ださばやと思ひさむらふ」といひて。幕に向ひシテを呼び出だす。
シテ出て、舞臺に入り仕手柱先に下に居ると。狂言「此間もさいさい異見申せども御聞きなく候まゝ。今よりしてはわらはが處には置き申すまじく候。何方へなりとも急いで御出で候へ。わらは中違ひ申す上は。此家の内には叶ひ候まじ。急いで御出でさむらへ。あゝさて腹立やつらにくや」といひて。シテの持ちたる扇を取りて打ち付け。「此體になりてもまだ扇子さばくりを致すか。腹立や〜」といひすてゝ入る。

シテ踏ひ出す

シテその扇を取り上げ見て左の手にてしをり。「げにや本よりもさだめなき世といひながら。うき節しげき河竹の。流れの身こそ悲しけれ」と。又正面伏せて悲しき心を見せ。それより出てゆく道になりて。「分け迷ふゆくへも知らず濡衣。野上の里を立ち出で」と立ち。「近江路なれど憂き人に。別れしよりの袖の露」と右受けて少し出で。「そのまゝ消えぬ身ぞつらき」と跡へ下り。打ちしをりて中入す。次第にてワキはトモを連れて出づ。トモ數人いづる時は主たる一人太刀を持つなり。舞臺に立ちならびて。「歸るぞ名残富士の嶺の。く。ゆきて都に語らん」と歌ひ。地取の間にワキは正面むきて。「是は吉田の少將とは我事なり。さても我過ぎにし春の頃東に下り。はや秋にもなり候へば。只今都に上り候」と名のり。又むき合ひて。白河の關路より歸りくるよしの道行を歌ひ。野上の宿に着きたる意味の文句ありて。トモに花子の事を尋ねさせ。今は此里に居らざるよし

中入

次第にてワキ出づ

一聲にてシテ出づ

舞臺に入る

トモと問答す

を聞きて都に歸り。宿願の子細あれば直に糺へ參詣すべき事をいひて脇座に着く。
一聲にて後シテ出づ。狂女となりて都に尋ね來たる跡なり。一の松にて。「春日野の雪間を分けて生ひ出て來る。草のはつかに見えし君かも」と歌ひ出だし。「夕暮の雲の旗手に物を思ひ」と右受けて空を見。「身をいたづらになす事を。神や佛もあはれみて。思ふ事を叶へ給へ」と正面へ詰足し。「それ足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦男女の語らひを。守らんと誓ひおはします」と舞臺に入り。「此神々に祈誓せば。なかしるしの無かるべき。謹上再拜」と。下に居て合掌し祈念す。それより「戀すてよ。我名はまだき立ちにけり」と立ち乗込拍子ありてカケリとなり。サシ下歌上歌などさまゝありて。仕手柱にてシテ留むると。トモ「いかに狂女。何とて今日は狂はぬぞ面白う狂ひ候へ」といひかけ。シテ「うたてやなあれ御覽

ぜよ今までは」と右の方見上げて。「ゆるがぬ梢と見えつれども。風のさそへば一葉も散るなり」と下の方を見。「たま〜心すぐなるを。狂へと仰せある人々こそ。風狂じたる秋の葉の。心も共に亂戀の。あら悲しや狂へとな仰あり候ひそよ」とトモに詰足していふ。トモ「さて例の班女の扇は候」と問ふ。シテ「うつゝなや我名を班女と呼び給ふぞや。よし〜それも憂き人の。形見の扇手に觸れて。打ち置き難き袖の露。古事までも思ひぞいづる」と答へて正面直し。「班女が圍のうちには秋の扇の色。楚王が臺の上には夜の琴の聲」と吟じ。地になりて「夏はつる扇と秋の白露と。何れか先に起臥の床。すさまじや獨寐の。さびしき枕して。圍の月をながめん」と。舞臺の眞中に下に居。「せめて聞もる月だにも。しばし枕に残らずして。又獨寐になりぬるぞや」と面伏せ悲しき思入なり。クセになりて「今の世までもらすらん」の打切にて立ち。仕手柱の

方へ行き。「頼めて來ぬ夜はつれども。欄干に立ちつくして。そなたの空よとながむれば」と。仕手柱にもたれる心持にて遠くながめやり。「夕暮の秋風。嵐山嵐野分も。あの松をこそはあとづるれ」と。舞臺の眞中へ行き。目附柱の方を指して見。「我待つ人よりの」と正面向きて遠く思ひやる心あり。「あとづれをいつ聞かまし」と跡へ下りてしをり。「せめてもの。形見の扇手にふれて」と扇ひらき見て左右をなす。

「欄干に立ちつくしては」は。橋掛へ行き欄干際に立ちてしたる太夫もあり。「又たのめて來ぬ夜はつれども」と。左の手いだし數ふるもあり。笹の傳の時は笹を持ち出て。「そなたの空よ」とは笹に手をかけてながめ渡し。「せめてもの」と笹を捨て。「形見の扇」と懐中せる扇を出だして見る形なりしと記憶す。

アゲより後は是といふ形もなければ略して。「繪にかける」とくつろ

中の舞

きて中の舞になり。「月を隠して懐に」とワカの上扇し。「持ちたる扇」と前に出だし見て。「取る袖も三重がさね」と角へ行き扇左に取り。「秋風は吹けども」と脇正面の方よりハネ扇して出て。「萩の葉のそよとの便りも聞かで」と下の方を見て角にゆき。「鹿の音」と扇上げ上を見て。「蟲の音も」と下を見て聞く心あり。「かれくの契り。あらよしなや」と。右へ廻りて打合をなし。「形見の扇より」と拍子ありて。「なほ裏裏あるものは」と扇出だし裏と表とを見。「人心なりけるぞや」と右の方に面使ひて見わたし。「扇とは空言や。逢はてぞ戀は添ふものを」と。跡へ下り下に居て打ちしをる。

之を見てワキはトモを呼び。「あの狂女が持ちたる扇見たきよし申し候へ」といひ。トモは其よしをシテに告ぐると。シテ「是は人の形見なれば。身を放さず持ちたる扇なれども。形見こそ今はあだなれ是なくは。忘るゝ隙もあらまじしものと。思へどもさすが又。添ふ

扇をみせ
よといふ

心地す
る折々
は、扇
取る間
も惜し
き物を
人に見
する事
なし」
と答へ
て。そ
の扇を
懐中す。



ロンギにて掛合いろくありて。シテ「形見の扇をなたにも。」地
 「身に添へ持ちし此扇。」シテ「輿の内より。」地「取り出だせば」と。
 ワキの扇をトモ持ち來りてシテに渡せば。シテ受取りて開き見。「此
 上は惟光に脂燭めして。ありつる扇」と。ワキの前へ行きて我扇を
 渡し。シテもワキも左の手に開きたる扇を抱ゆるやうに持ち。シテ
 はワキの持てる扇を。ワキはシテの持てる扇を見。「御覽ぜよ互に」
 と。又シテもワキも我持てる扇を見て互に顔を見合はせ。「扇のつま
 の形見こそ」と扇逆手に持ち見て。右へ廻り開き留むる。

藤戸

前ジテ 海人の母

深井 葛 葛帯 箱 唐織

後ジテ 海人の亡靈

瘦男 黒頭 鬘斗目 水衣 腰帶 杖

ワキ 佐々木三郎盛綱

梨子打鳥帽子 白鉢巻 厚板 直垂上下 小サ刀 扇

トモ(數人) 從者

鬘斗目 素袍上下 扇 一人は太刀を持つ

アヒ 下人

狂言上下 扇

佐々木三郎盛綱備前の兒島に平家を攻めし時。ひそかに海路の
 案内せし海人を刺し殺して我功にしたりしを。其恩賞とて兒島
 を給はり。入部して民の訴訟を聞きたる日。殺されし母來りて
 恨を述べしかば。盛綱慰めて我屋に歸し。其子の冥福を吊ひて
 じ靈を成佛せしむる事を作れり。下懸は出端ありて太鼓を用ふ
 能のしをり 六の巻